

K2A-20

Z32-B88

監修 馬生島有 村藤崎島

船の金

六双犬忠録附六

號月正

国立国会
8. 3. 26
図書館

大正十一年十一月廿六日印刷
大正十一年一月一日發行



號商第

卷四第

Kodak Color Control Patches

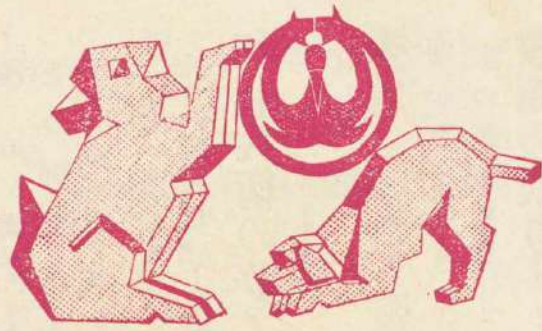


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



あけましておめでたう

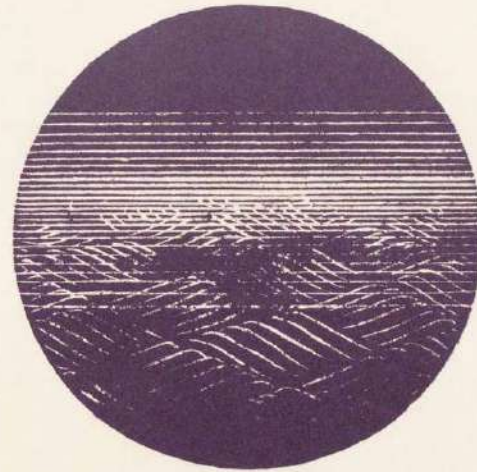
本年も相變らぬ御ひいきのほどお願いいたします
 より 初 賣 出 し

坊さま嬢さまの大好な玩具やお友達の方々へふさわしいお年玉なき澤山ありますから是非御覽下さるやう願ひ上げます

東京
 今川橋

松屋呉服店

正 賀



且元年一十正大



店服吳うとい屋坂松

(野上京東)



目次

僕 <small>わが</small> の歳 <small>とし</small> <small>表紙、原色版</small>	岡本歸一
花 <small>はな</small> の御 <small>ご</small> 殿 <small>どの</small> <small>(口繪、三色版)</small>	同
不老不死 <small>ふし不死</small> の國 <small>くに</small> <small>(口繪、三色版)</small>	同
呼 <small>よ</small> 子 <small>こ</small> 鳥 <small>とり</small> <small>(曲、詩)</small>	一本居長世
二匹 <small>ふたひき</small> の犬 <small>いぬ</small> と少女 <small>しょうじょ</small> <small>(童話劇)</small>	野口雨情
和莊 <small>わじょう</small> 兵衛 <small>べいゑ</small> の夢 <small>ゆめ</small> <small>(童話)</small>	楠山正雄
母 <small>はは</small> <small>(推測童話)</small>	七玉置光三
白 <small>しろ</small> 黒 <small>くろ</small> <small>(挿げなし)</small>	岡本歸一
歌 <small>うた</small> <small>娘<small>むすめ</small>(童話)</small>	三霜田史光
赤 <small>あか</small> い夕 <small>ゆふ</small> 日 <small>ひ</small> <small>(童話)</small>	三人見東明
雀 <small>すずめ</small> の親 <small>おや</small> 子 <small>こ</small> <small>(童話)</small>	西伊藤温子
假面 <small>かめん</small> の祟 <small>たたか</small> り <small>(童話)</small>	六 沖野岩三郎
九官鳥 <small>くわんきう</small> と兎 <small>うさぎ</small> <small>(森菜童話)</small>	四 野口雨情選
マンゴーの花輪 <small>はなわ</small> <small>(童話)</small>	四 山野虎市



忠犬雙六 (大附録)

岡本歸一

家 <small>いへ</small> なまき子 <small>こ</small> <small>(名作童話)</small>	三宅房子
赤髯 <small>あかひげ</small> の神様 <small>かみさま</small> <small>(童話)</small>	五 齋藤佐次郎
金 <small>かね</small> の虎 <small>とら</small> 犬 <small>いぬ</small> <small>(傳説童話)</small>	六 藤澤衛彦
僕 <small>わが</small> の初夢 <small>はつゆめ</small> <small>(繪物語)</small>	三 船橋重一
かくれ玉 <small>かくれたま</small> <small>(童話)</small>	六 志村照子
流罪 <small>りゅうざい</small> になる迄 <small>まで</small> の頼朝 <small>よりとも</small> <small>(史劇)</small>	六 窪田空穂
人魚 <small>にんぎょ</small> の海 <small>うみ</small> <small>(童話)</small>	五 秋庭俊彦
呼 <small>よ</small> 子 <small>こ</small> 鳥 <small>とり</small> <small>(童話)</small>	八 野口雨情
暮路 <small>くれじ</small> の森 <small>もり</small> <small>(童話)</small>	八 笹原とり子
郊外 <small>きょうがい</small> の工場 <small>こうじょう</small> <small>(自由童話)</small>	四 山本鼎選
や 久 <small>ひさ</small> <small>(幼年詩)</small>	六 若山牧水選
通 <small>とほ</small> 信 <small>しん</small> <small>(童話)</small>	八 編輯部選





花の御殿

岡本錦一畫

「もし、鶯さん。お前さんは、ずるぶん歌がお上手ね。お前さんの唄った歌の女王様のいらつしやる花の御殿といふのは何處なの。」
と、歌娘がたつねました。すると、鶯はさも得意さうに、

『この森の奥の奥のずうつと奥です。それはく綺麗な御殿ですよ』と、いひました。

※このページの二二頁を御覽下さい。



≡ 台覧を蒙る ≡

野口雨情先生著

本居長世先生作曲
岡本歸一先生挿畫

註文増
加し日々
送はるに
追はるに

▼新年にはこの光榮ある名譽ある本書を御讀み下さい

四六版上製表装六
刷印圓美本全一冊
定價金一圓廿八錢

文部省認定
童謡集

十五夜お月さん

●お待ち兼ねの童謡作法の良書が生まれました
野口先生新著
本書は大人でも子供でも誰れにも童謡が直
ぐ作れるやうに尋常科の教科書よりも、も
つとやさしく判りよく書いてあります。

新版

童謡作法問答

▽新形版上製美本全一冊△
▽定價金一圓 送料八錢△
東京市神田南神保町 尙文堂
振替東京一九三四四

本居長世
先生作曲 **新民謡**

一冊三十錢づつ
送料四錢

(1) さすらひの風の歌	(5) 關の夕ざれ
(2) 夕潮	(6) 白月
(3) 豊作歌	(7) 咲いた櫻
(4) 別後	(8) 砧の音

(刊近) (刊近) (刊近) (刊近)

佐々紅華
先生作 **童話唱歌**

一冊二十錢づつ
送料二錢

(1) はだか虫	(3) 青い鳥	(5) 茶目子の日
(2) 牧場の兔	(4) 鋤と歌	(6) 穂ちやんの本

山本芳樹
先生作曲 **創作曲譜**

一冊廿五錢づつ
送料二錢

- (1) 小唄
雲の行方 山本榮樹先生歌
月に向つて 同
行く 春 竹久夢二先生歌
鳥 西條八十先生歌
旅 山本榮樹先生歌
山の母 山本榮樹先生歌
青い月夜 露谷虹兒先生歌

誰にもすぐ分る標本譜の讀方を説明したる
樂譜の知識

(本譜早わかり)
一冊金五十錢 送料金二錢

どなたも欲して居る西洋名曲を多數集めたる

ヴァイオリン曲粹 第一編 第二編

□各一冊五十錢 送料金四錢

マンドリン曲粹 第一編 第二編

□各一冊五十錢 送料金四錢

唱歌、洋曲、歌劇に和曲を加へ八十餘曲で、説明は親切、樂譜は正確、
春柳振作先生編

ハーモニカ速成 一冊三十五錢 送料二錢

歌米作家の手に成れる進行曲中奏法簡易にして然かも新らしい味有るもの二十五曲を収めた
菊池盛太郎先生編

二十五進行曲 一冊金八十錢 送料六錢

歌舞伎レコード第二回賣出し

前田、梅幸、羽左、松助、片市、幸藏、村右工門などの顔觸れで吹込みました
玄治店、直侍、桐一葉、お祭り佐七のレコードを賣出しました所、あらゆる階級からいろ／＼な方面よりして異常の賞讃を頂きました。社會的に、豫想外に反響の大きかつた事が樂社に、より以上の自信と力を與へました。このたびは新たに第三郎、竹松を加へて左の通り第二回を發賣致す事になりました。是非皆衆の御批判を頂き度いと存じます。

株式 日本蓄音器商會

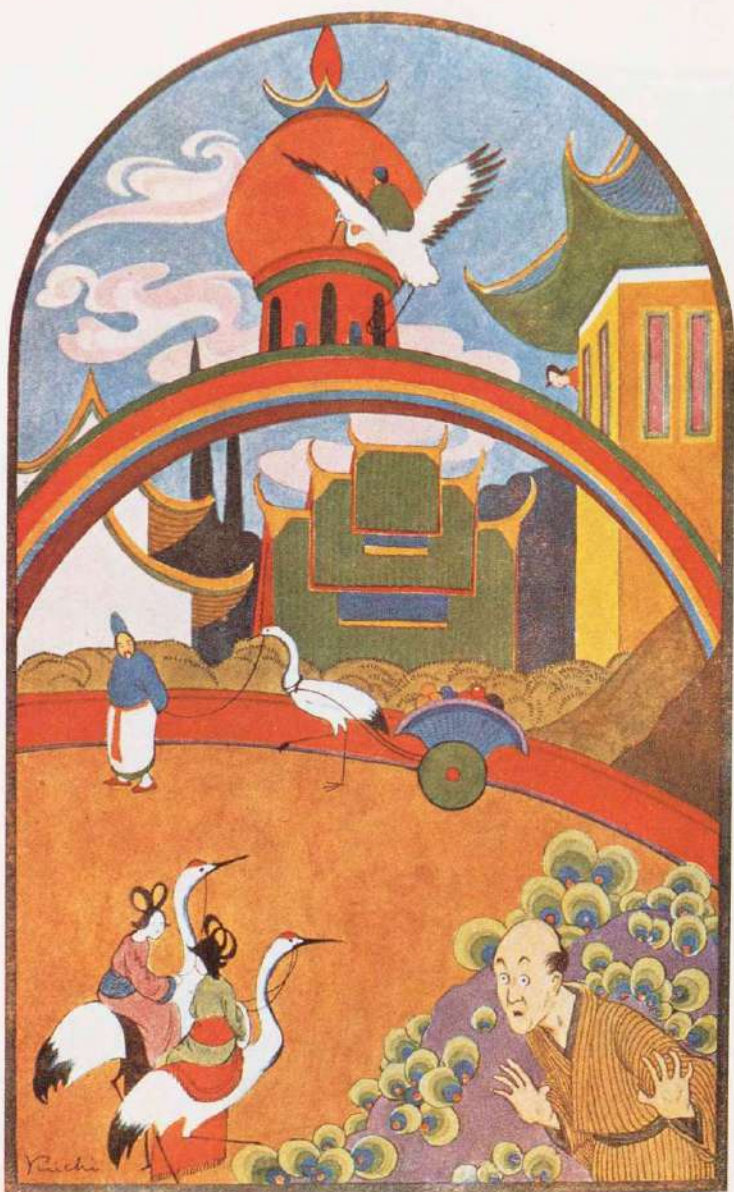
- 小袖會我薊色縫 稻瀬川の場……………四 枚
 - 一 つ 家 淺草淺茅ヶ原の場……………三 枚
 - 伊勢音頭戀寝刃 二番目八切油屋の場……………七 枚
- 全部兩面 鷲印紫紙 定價金貳圓也
向此外に拾數種の面白い新譜が御座います



(三付前)金

八九五四五京東替振 社版出眉白 二十の一町田區芝市京東
(り有に店器樂るな名有國全)

(二付前)金



「和莊兵衛の夢」の第一二頁を御覽下さい

東京日本橋
通壹丁目角

振替東京二三八番
電話本局二四〇四・四一四

大倉書店發行



読んで面白く貰つて喜ばれる児童お伽書をお勧め致します

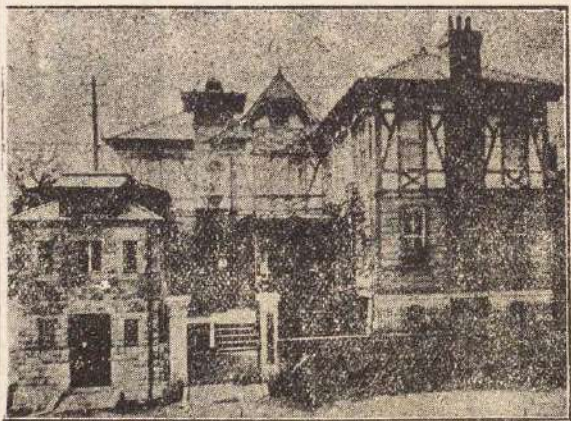
<p>ろしあ傳説集</p> <p>昇曙夢譯洋装 四六判全一冊 定價金壹圓八十錢 書留送料金十八錢</p>	<p>ろしあ民謡集</p> <p>昇曙夢譯洋装 四六判全一冊 定價金貳圓八十錢 書留送料金十八錢</p>	<p>ろしあ童話集</p> <p>昇曙夢譯洋装 四六判全一冊 定價金壹圓八十錢 書留送料金十八錢</p>	<p>ろしあお伽集</p> <p>昇曙夢譯洋装 四六判全一冊 定價金壹圓八十錢 書留送料金十八錢</p>	<p>ろしあ俚諺集</p> <p>昇曙夢譯洋装 四六判全一冊 定價金壹圓八十錢 書留送料金十八錢</p>
<p>児童の讀本として興味あるのみならず露國及露文學の研究好資料といふべし</p>	<p>古代の祭禮歌より現代の小唄に至るまで凡そ十四種二百餘篇何れも露國の偉大な創造力と沈痛なる内面生活の結晶なり</p>	<p>露國の童話作者中最も有名な五大家の代表的童話百六十七篇を選び原書より直接に譯したるもの將に露國童話の全集であります</p>	<p>世界中で最も面白い特色のある露西亞の代表的お伽集廿六種を選び何人にも解り易く譯したるものなり</p>	<p>露國古來の俚諺を其部類に従つて系統的に編纂せるもの片言後釋能く露國民の信仰・理想・道德・處世觀・贈答觀念等を知る事が出来ます</p>

天下の少年は争ふて大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

會長 尾崎 行雄

學監 文學博士 山内 繁吉
 顧問 新渡戸博士 三宅 隆士
 井上博士 浮田博士
 岡田博士 文登 大田



一人前の男となるには
 せうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はせうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い経験のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京 河原(七茶の水電車通り)
大日本國民中學會

振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇三
 助田三〇〇三

◎ 創立 以 來 二十 年 記念大特典提供 目下新學期開講 入會の絶好機

講義録見本つき 規則書無料進呈



鳥子呼

本居長世作曲

♩早ク

こころもがめたかよぶこころ

カッボン カッボン よぶこころ

こころはおやまのりな

こころはたにまのりな

こころもがめたよぶこころ

カッボン カッボン よぶこころ

へまさ皆るさ下てし愛を繪の私

きがは繪伽お船の金

◇◇ 行發回一月毎 ◇◇

原色版四度刷
四枚一組

定價金貳拾五錢
送料貳錢

第一輯 一月發行

青い鳥

(メーテルリンク作)

(樵のお家)

(思ひ出の國)

(夜の宮)

(未來の國)

發行所

岡本歸一

東京四谷區船町拾壹番地

□ 皆さまから畫集を出せと長い間せがまれましたが、こんどアルバムにでも貼込むでためておいて下さいれば、一年なら四十八枚二年なら九十六枚になりますから、いつそ皆さまに畫集を作つて頂かうと思ひまして、企てましたのですからどうぞ御賛成下さい。反つて御楽しみも多し事と思ひます。

□ 取材は世界の有名な御伽噺や、金の船にのりました先生方の童話や私の空想やからとります。印刷にも充分注意して紙もいゝ物を使ひますから、きつとこれまでにない様な立派なものになる筈です。

□ 他には賣つてゐませんから御面倒でも直接申込む下さい。御便宜上いく月分でもまとめて送金して下さいてもよろしく御座います。數も澤山は刷りませんから至急はがきで申込みだけでもしておいて下さい。必ずそれだけは残しておきます。

□ 今まで問合せを下さいました皆さまにもお知らせする筈ですが別にはいたしませんかち此の廣告で御承知下さい。

□ なほまた神田の尙文堂から西條先生野口先生の御作に音譜がついて私が繪をかいて出る筈ですから、これも合せて集めて下されば此の上もない幸いです。私の繪を愛して下さいる皆さま、どうぞおはがきを下さい。

童謡劇

二匹の犬と少女

野口雨情

場所、 廣い道路。(異人さんの門前)
時、 小春風の日曜日。

登場者、 きよ子さん。(七八つ位の少女)

つね子さん。(お友達の少女)

赤い帽子を冠つた白い毛の犬。

青い帽子を冠つた褐色の犬。

大勢の少年と少女。

きよ子さん

「赤い帽子冠つて

犬が出て来たよ

つね子さん

「異人さんの 犬だから



遠くで見えてゐませう。

きよ子さん

「青い帽子冠つて

犬が出て来たよ

つね子さん

異人さんの 犬だから

遠くで見えてゐませう。

白い犬

「異人さんの 犬だなんて

子供が云つてるよ

褐色の犬

「子供なんか構はないで

あつちへ往かないの。

きよ子さん

「犬がなんか小さい聲で

お話してゐるわ

つね子さん

「帽子なんか冠つて

おしやれな犬だわね。

白い犬

「おしやれだなんて子供が云ふから

あつちへ往きませうよ

褐色の犬

「誰もゐないあつちへ往つて

駆けくらしませうね。

きよ子さん

「犬が駆けっこするんだつて

話してゐるのよ

つね子さん

「犬の駆けっこ面白いわね

ついてって見ませうよ。

白い犬

「子供が後からついて来から

急いで往きませうね

褐色の犬

「白さん後を見ないで



急いでお歩きよ。

きよ子さん

「犬の歩くはほんとに早いね」

つね子さん

「犬の足は長いから早いんだわよ。」

白い犬

「ついて来るとうるさいから」

駈けて往きませうよ

褐色の犬

「ほんとにうるさい子供だわね。」

トツ トツ トツ トツ(駈けてゆく足拍子)

きよ子さん

「ほら 駈け出した」

つね子さん早くお駈けよ

つね子さん

「きよ子さん跳足になつて早く お駈けよ。」

トツ トツ トツ トツ(駈けてゆく足拍子)

白い犬

「お裾ちゃん 負けずに早くお駈け」

褐色の犬

「白さん 負けずに早くお駈け。」

トツ トツ トツ トツ(駈けてゆく足拍子)

集つて来た大勢の少年

「赤い帽子冠つて 犬が駈けてくよ」

集つて来た大勢の少女

「青い帽子冠つて 犬が駈けてくよ。」

トツ トツ トツ トツ(駈けてゆく足拍子)

大勢の少年と少女

「きよ子さん つね子さん 負けずにお駈け」



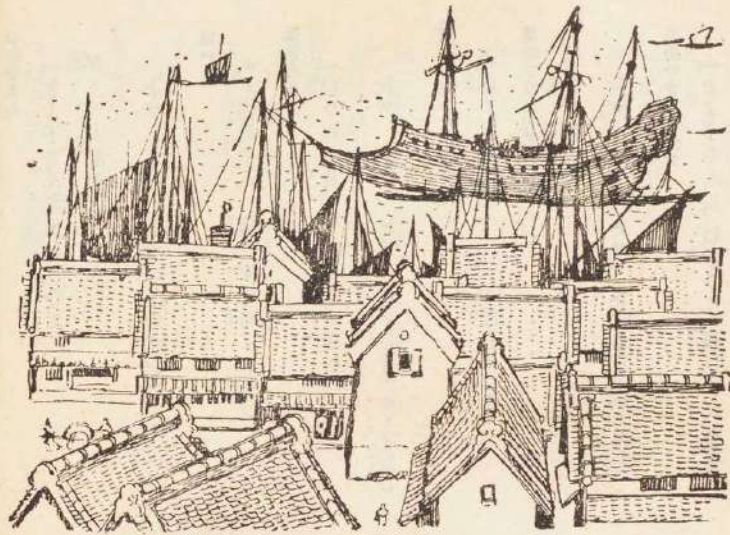
きよさんとつね子さん

「赤い帽子 早いな」

青い帽子 早いな

トツ トツ トツ トツ(駈けてゆく足拍子)

(幕)



和莊兵衛の夢

楠山正雄

一、漂流

むかし肥前の國の長崎に、四海屋和莊兵衛といつて、その時分「唐物」といつた阿蘭陀や支那の舶來品の商をして有福なくらしをしてゐる商人がありました。長崎といへば、むかしは日本にたゞ一つしかない外國貿易の港で、日本へ來る外國人は、英吉利人でも、阿蘭陀人でも、支那人でも、朝鮮人でも、長崎といふ門をくゞらなければ、國の中にはいることはできなかつたのです。

和莊兵衛はかういふ所に生れて、その上商賣が唐物屋でしたから、始終目色や毛色のそれ／＼にちがつた外國人が入りかへり立ちかはり店へたづねて來ましたそれで子供の時から毎日見てゐるあの海の上をすん／＼遠く逆舟にのつて行けば

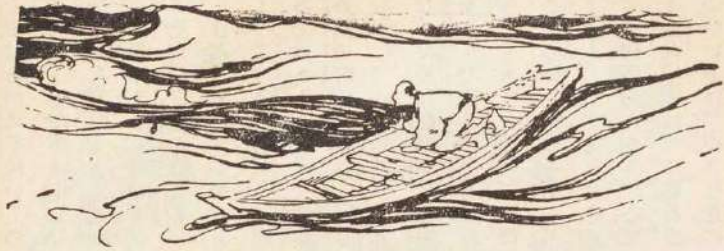
そのはるか向うにいくつもいくつも知らない外國のあることを知りました。和莊兵衛はそれがどんなに不思議な國だらうと心の中でいろ／＼に想像しながら、早く大きくなつて、さういふ不思議な國に行つて見たいと望んでゐました。

けれども大きくなると、こんどは家の商賣が忙しくつて、とても日本の國をはなれて外國へ行くどころではありません。和莊兵衛は幾つになつても時々外國の町の夢を見ながら、毎日の仕事に追はれてゐる中に、いつか四十年立つてしまひました。四十になつた時和莊兵衛は家業を息子にゆづつて、やつと氣まくな隠居の身分になりましたが、もうその時は年をとりすぎて、それに長年の苦勞で體もつかれてゐました。もう今更、外國へ出かけるのも億劫になりましたし、それにそんなことをいひ出せば息子はじめ親類の人たちが心配して、止めるに極まつてゐました。それで和莊兵衛もあきらめて、毎日釣竿をかついで、小さな舟にのつて沖の方に漕ぎ出して

行きました。そしてたつた一人ひろい海の上で青い水をながめながら、うつら／＼不思議な外國の夢を見つゞけて見てゐました。

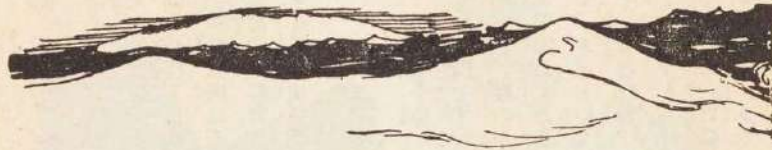
或年の八月十五夜の晩でした。あまり月がいゝので、和莊兵衛はいつものやうに舟を仕立て、月見がてら夜釣に出かけました。ひろい海の上はどこまでつゞいてゐるか先の知れないほど遠くまで晴れわたつて、月の光がその上にふりはり薄い絹をかけたやうに霞んでゐました。あんまりい／＼けしきなので和莊兵衛はふら／＼と魂が浮かれて抜け出したやうになつて、いつかしら陸からすつとはなれたはるか沖合までうか／＼舟を漕出して行きました。

するうち月がだん／＼高く上がつて、もう大分夜が更けたと見えて、急に寒さが身にしみて來ました。和莊兵衛は思はず「はくしよい。」とくさめを一つしながら、そろ／＼歸り支度にかゝらうとしてふと何氣なくうしろの空を見ますと、いつどこから湧き出して來たか氣味のわるいほどまつくるなそれこそ霧



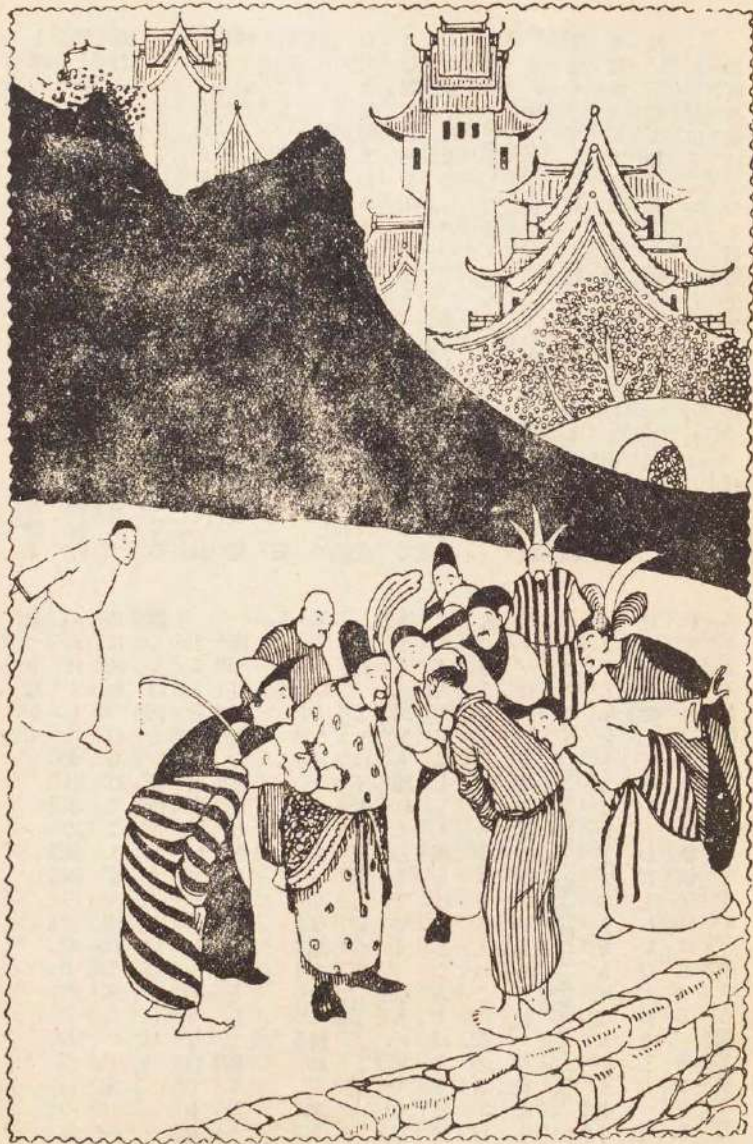
でも乗つて来さうないやな雲が、むく／＼と立つてゐました。おやと思ふまもなく雲はすん／＼大きくなつて、雨をもつたしめつぽい風がそれと一しよに吹き出して来ました。かうなると變りやすい秋の空のことですから、月も星も見／＼隠れてしまつて、ひどい荒れ模様になつて来ました。和莊兵衛はあわて力まかせに櫓をこいで、少しでも早く陸に舟をつけようとあせりましたが、あせればあ

せるほど舟は陸から遠ざかつて沖へ／＼と吹き戻されました。雨と風は一刻々に降りつゝり、吹きつのがつて、とうに帆柱は吹き折られ、櫓も浪にさらはれてしまひました。和莊兵衛はやつとのこつた一枚の板子でしばらくは漕いで見ましたが、もういよいよ腕も肩も折れさうになつたので、この上風と浪を相手に争ふのも馬鹿々々しくなつて、これからはどうでもなれ、沈むとも助かるとも神様まかせとあきらめて、舟の中に腕を組んだまゝほつねんと坐つてゐました。それでも時々舟が沈みさうになるので、水だけはかい出し、かい出して、それから三日三晩、たゞもう雪の山のやうな浪のしぶきの中を分けて、西も東もなしに漂流して行きました。四日目の朝になつて、やつと風がをさまつて朝日が煌々と海の上にあがりました。けれどももうその時分には、日本から何萬里隔たつたか、何千里隔たつたか、見當のつかないほど遠方に流れて来たらしく、いくら目が裂けるほどながめまほしても、島も



山も見えませぬ。空の色や水の色までも變つてゐるやうに思はれました。三日三晩の間目も鼻もふさがれてゐたやうな風がすむと、和莊兵衛はがつかりして、急におなかを空いて来ました。いくらおなかを空いても海の上ではどうしようもないので、不思議に舟が沈まなかつたと思ふと、こんどは空腹で死ぬのか、やれ／＼と和莊兵衛はつぶやきながら、何の氣なしにそこらを探りますと、ふと手に當つたものがありました。見るとそれはとうに流されたと思つてゐた釣竿でした。和莊兵衛は思はず、「あゝ、助かつた。」と叫びました。

それからはおなかを空くと、釣竿を下してお魚を釣りました。そして島流しになつた俊寛僧都のやうに、生魚を食べては命をつないで、風の吹くまゝに、浪の押ししてくれるまゝに、うつら／＼と海の上を流れて行くうちに三月立ちました。もう何萬里来たかわからない、そろ／＼世界の果てに近くなつたのではないかと思つてゐますと、或日海の色が變つて、見わたす限りまつくろな、のぞいても一寸下が見えないやうな泥海の中に入りました。もう風もなければ浪も立ちません。一日釣竿を下しても雑魚一つかゝりません。深い淵の中にも落ちたやうに陰氣で薄氣味のわるい上に、何にも食べないので、體はつかまるし、元氣がまるでなくなつて、舟底につゝ伏したまゝ、それからは夢を見てゐるのか、死にかけてゐるのか分らないやうな有様でまた十日ばかり立ちました。すると十日めの朝、夢うつゝで、どこからかふといふ匂ひの風がそよ／＼吹いて来て咽喉に通つたやうに思ひましたが、間もなく氣分がはつきりして、



急に力が出て来たやうでした。ふしぎに思つて、頭をもちやげて見ますと、遙かの向うに一つの大きな島が見えました。その島の方からいゝ匂ひの風が、いゝ心持ちに吹きつけてくるのでした。

和莊兵衛はぞく／＼するほど喜んで、少しでも早く島の方に舟をつけたいと思ふ間もなく、舟はすんすん水を切つて、島の方へ進んで行きました。

二、不 死 國

間もなく島に上がると、何しろ咽喉がかわき切つてゐる所ですから、どこかに水はないかと思つてさがすと、巖の中からきれいなきれいな泉がどん／＼ふき出してゐました。傍によつて見るとうす赤い水で、ふんといゝ匂ひが立ちました。両手にしやくつて一口のむと、何ともいへないおいしい味で、舌がとろ／＼とろけ出すかと思はれるほどでした。そしてほんの一口飲んだだけですけれど、かれこれ半年も空かしきつてゐたおなかゞ一度にくちくちくたつて、

急に元氣が出て来ました。和莊兵衛は生き返つたやうな顔をして、久しぶりでどん／＼土の上を踏みながら、

「やれ／＼助かつた。だが一體こゝは唐か天竺か、それとも阿蘭陀か知らん。」

と獨言をいひながら、すん／＼進んで行きました。石で築いた高い堤を一つ越すと、きれいな町に出ました。家の作り方でも、草木のかたちでも、すっかり日本とは變つてゐて、目がさめるやうに光りかゞやいてゐました。

和莊兵衛がふしぎさうな目をしてうろ／＼歩きまはつてゐますと、方々の家の中から大勢おもしろい風俗をした男や女がばた／＼出て来て物めづらしさうに和莊兵衛をとりまいて、口々に何だかべら／＼分らないことを話し合つて、時々笑ひました。その人たちの様子を見るといかにも上品で、むろん蝦夷でもなし琉球でもなし、もつとすつと文明の進んだ國の人らしく見えるので、多分北京か南京の都にで

も来たのだからと思つて、唐人から習つた支那語で話しかけて見ましたが通じません。それでは阿蘭陀かしらと思つて、うろおぼえの阿蘭陀語で「今日は」といつて見ましたが、よけいけんな顔をしてじろじろこちらを見るばかりです。和莊兵衛も困つて、長崎でいろ／＼の外國人から聞きおぼえた言葉を、英吉利でも、西班牙でも、葡萄牙でも、朝鮮でも、安南でも、暹羅でも、何といふことなしに片つばしから大きな聲でわめき立てますと、向うもまげずに大きな聲でわめきかへします。それがいつまでたつてもお互ひに通じないので、両方とも呆れて、ぼんやり睨めつこをしたまゝつゝ立つてゐました。

その中、五六人役人らしい人が出て来て、何か相談するやうでしたが、しばらくすると髪を長くした四十ばかりのりつばな人が、群衆を分けて出て来ました。そして和莊兵衛の顔を見ると、支那語で、

「あなたはどこから来ました。」とたづねました。和莊兵衛はやつと言葉が分かつたので、ほつと思

をつきながら、

「わたくしは大日本の長崎の者ですが、あらしのためには吹きつけられてこゝまで流れて来たのです。一體こゝは何といふ國でせう。」といひました。

するとその人はさもびつくりしたやうな目でもう一度和莊兵衛の顔をながめました。そして横手をうちながら、

「それは／＼どうも、大へんな遠方から流れて来たしたね。こゝは不老不死國といつて、日本からでは、海上五六萬里も離れてゐるでせう。仙人の術でもなければ人間にはとても來られるところではありません。さういふわたしもやはりもとはこの國の者ではなく、むかし支那の秦の國の始皇帝に仕へた徐福といふものです。始皇帝は大層我儘な亂暴な王様で、いつまでも年をとらない、いつまでも死なない不老不死の薬を探して來いとわたしにいひつけました。それでわたしはさん／＼難儀な目にあつて、やつとこの不老不死國に着いたのですが、往きと同じやうな

「日本といへばわたしの故郷の支那とはお隣同士ですから、國の人に逢つたと同様です。さあ、わたしの家へいらつしやい。」

かういつて徐福は和莊兵衛を家へつれてかへりました。それから毎日徐福の家に世話になつてゐる中に、いつか二三十年立つてしまひました。

和莊兵衛はこの間に國中をめぐりあるいていろいろめづらしいことに出席ひました、何しろ不老不死國といふだけに人が死ぬといふことも生れるといふこともありません。それでも千年に一度どうかして一人ぐらゐ死ぬことがないでもありませんが、そのあとから一人生きて來ますからいつまで立つても人のへるといふことがありません。年寄と子供といふものゝない國ですから、誰を見ても四十ぐらゐの顔付をしてゐます。男でも女でも病氣をわづらふといふことがありませんから、いつも同じやうな血色でしやん／＼達者に歩いてゐます。一年中うら／＼かに日が照つて時々五日めに一度風がふいて十日めに一

苦勞をもう一度して、始皇帝のやうな無慈悲な主人の所へ歸つて行くのがいやになつたので、そのまゝこゝに止つてゐるうちいつか千年餘り立ちました。けれども来た時のまゝ少しも年をとらないし、病氣一つしたことがありません。それでこの先いつまで生きるか、壽命に限りがないのです。あなたもこゝまで来た以上は日本へかへらうといつてもなか／＼かへれるものではないのだから、あきらめていつまでもこの國でおもしろくお暮しなさい。」

かう徐福かくはしく話をしてくれたので、和莊兵衛もやつと分かつて、これも横手をうちながら、

「まああなたが子供の時から本で讀んで知つてゐる秦の徐福さんでしたか。不老不死國のことは話では聞いても、今日までほんたうとは思ひませんでした。ひよんなことござういふ結構な國に流れついた上は今更老少不定の日本國へかへらうとは思ひません。」といひました。

徐福はうれしさうになづいて、



度雨がふつて、い／＼あひに土をうるほして、草木を育て、行きますから、さして働かないでもひとりどに花が咲いて木の實が生つて、穀物が實ります。鶴のたくさん居る國でもありますから、どここの家にも一羽二羽と鶴を飼つて、牛や馬の代りに、畑を耕したりその脊中に乗つて方々とんで歩いたりします。和莊兵衛も間もなく馴れて、器用に鶴をのりまはしては方々とびまはつて見物して歩きました。

この國で一ばん賑かな公園は桃山といつて、日本の伏見桃山の何千倍もみごとな紅白の桃の花が咲きみだれた山で、そこには夜も晝もおもしろい芝居や見世物がいろ／＼あつて、遊びに行く人の足の絶えないところですよ。けれどそれよりもつと賑かなのは、八千年に一度咲く椿山の公園です。いくら死ぬことを知らない不老不死國の人たちでも八千年に一度ではさすがに待ちかねると見えて、今年には椿山の花の咲く年だといふと、前からいろ／＼遊びの趣向をこらして置いて、いよ／＼咲きはじめたといふと



ら見てみると、日本で九月頃雁が竿になつて南の國へ渡つて行くのを見るよりもつと夥しい數なので、和莊兵衛もさすがにおどろきました。

こんな風な遊びごとはこの外にも数しれずあつてそれは國中の人が同じやうに一年中遊びくらしてゐるといつてもい／＼ほどの結構づくめな國でしたが、たゞ一つ悲しいことがありました。それは死にたくつても死なれないといふことでした。せめて病といふものゝ味だけでも知りたいと思つてもそれもできないことでした。はじめはこの國の人もそんなこと

を思つても見なかつたのですが、いつ誰か傳へたか天竺から佛様のお經の本がこの國に傳はつて来て、それには死ねば極楽といふこの上もない楽しい國へ行かれると書いてあつたので、さあそれから誰もその極楽といふ國へ行つて見たくなつて、それがこの國の人の病といへば病になりました。毎日遊びあきるほど遊びくらしてゐるくせに、まだ遊び足りない見えて、どうかして一度死んで、極楽へ行つて遊び飽きたいと思ふやうになりました。ですから何萬人の中であつた一人死ぬものがあると、あゝ極楽へ行つたのだなと、みんな言つて羨しがりました。

そこで日本なら若返る法や、いつまで死なない術を學ぶために仙人になるところですが、この國では年をとつて、死ぬ術を學ぶために仙人になつて、深い山の中や峻しい谷の奥に入つて荒い修行をするものが出来ました。けれども日本で仙人の修行をして長生をしたものゝないやうに、この國でもまた仙人になつて死んだといふ話を聞くことはありませんで

した。

ですからこの國では河豚だの、斑猫だのといふ人間の體に毒なものほど早く死ぬ薬だといふので價段が高く、日本や支那で長生の薬だといつて大事がる人魚などはよほどの貧乏人でなければ口にも入れない下等な食物になつてゐます。その代り河豚の煤漬だの、斑猫の鹽辛などといふものはよほどのお金持でなければ食べられない御馳走で、それを食べるといくら不死國の人たちでもさすがに毒に中つて、ちよいとの間お酒にでも酔つたやうにふら／＼目がまはります。さうするとみんな手をたゝいて、

「死ぬといふのはこんなものかしらん。極樂が近くなつたやうだ。おもしろい、おもしろい。」と、ひよろ／＼しながら踊りまはるのでした。

和莊兵衛ははじめは馬鹿々々しいと思ひましたがなるほど百年二百年長生をしてゐる中に、だん／＼長生に飽きて来て、やはり人並に死にたくなりました。一度死にたいと思ひ出すと、もう何が何でも死

なすにはゐられないやうに思つて、毎日三度々々食

事のあとに毒薬を飲みましたが、一向利目がありません。何百尋もある深い海の底に沈んで見ても、すぐ徳利のやうにはこんと浮上がつて、波の上を陸と同様達者に歩きました。何千丈もある高い山の上からとび下りて見ても、起上り小法師のやうに、かすり傷一つつかずにびよこりと起き返りました。

いよ／＼死なれないと極まると和莊兵衛もあきらめて、退屈しのぎに、いつそ死なれないのを幸ひ、この先何千年もかゝるつもりで、三千世界をめぐり歩いて、異つた國々のめづらしい風俗を見て歩かうと決心しました。

そこで人からは、あんな下等なものをといつて笑はれるのかもまはず、人參だの、人魚だのといふ長生の薬になる食物を三度々々食べて、十分元氣をつけておいて、或日徐福にあてゝお禮の手紙を一本書きのこしたまゝ、のり馴れた鶴に乗つて南の方に向つて飛んで行きました。(つゞく)

母さん

(推薦童話)

玉置光三

母さん めんめは
空の色

母さん お乳は
白い雲

赤ちやん お顔は
薔薇の花

紅くて あかるい
薔薇の花



白黒赤

岡本 歸一

ある町の角で、煙突掃除やとメリケン粉の袋をか
ついだ粉やとが、往來二十錢銀貨が落ちてゐるのを
同時に見附けましたので、先を争つて拾はうとした
拍子に、掃除やのすゝを落す長い棒の先のブラシが、
丁度その上で、看板へ一生懸命赤いペンキをぬつて
ゐたペンキやの顔へぶつかりました。



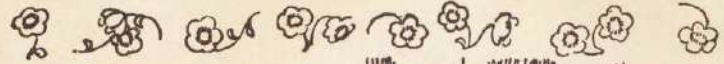
ペンキやが怒つて下で二人が銀貨のとり合ひをし
てゐる上へ塗つてゐた赤ペンキをぶちまけました。
すると今度は二人が銀貨の事も忘れてかん／＼に怒
つて、いきなりペンキやの乗つてゐる梯子をはづし
ましたのでペンキやはまっさかさま。このさわぎの
内に、かんじんの銀貨は小僧が拾つてしまひました。



三人が三人とも白くなつたり黒くなつたりしたので、誰れだかお互ひにさつばりわからなくなりました。誰れを撲つてゐるのかわからないので、撲り合ひして居るのが馬鹿々々しくなりました。ペンキやが悪いのだ、どつちがペンキやだと一人がどなりますと、二人とも己れぢやないよと云ひます。とうとうけんくわはどこかへとんで三人とも笑ひ出しました。



おつことされたペンキやは掃除やのすゝの袋をひつたくつて、いきなり粉やを撲りましたので、白かつた粉やが眞黒になり黒が二つになり、えんとつやが粉屋の袋でペンキやを撲つたので今度は白が二つになり、三人が黒くなつたり白くなつたり、白くなつたり黒くなつたり。



娘歌

光史田霜



昔、西洋の山奥に綺麗な娘とお爺さんが住んで居りました。その娘は小さい時にお母さんに死別れて、また、暫らくしてからお父さんが山へ獵に行つたきり、歸つて来ませんでした。村の人達は大層心配して、皆んなで手分けをして方々の山を探して見ましたけれど

たうとう見當りませんでした。お母さんに死別れて、またお父さんが行方知れずになつたので、娘はどんなに悲しんだことせう。それからは、たつた一人のお祖父さんと毎日畑へ出て仕事をしたり、家にゐて繻物をしたりして暮してゐました。お祖父さんは大層娘を可愛がつてくれましたので、娘はだんだんとお父さんやお母さんの居なくなつたのを悲しむこともなくなつて、お祖父さんと楽しい日を送るやうになりました。

この娘は大層歌が上手でした。毎日々々仕事をしながら、節面白く美しい聲で歌を歌ふのでした。歌の上手な綺麗な娘さん」と云へばその邊の山奥では誰一人知らぬ者もない位でした。それで誰云ふとなくこの娘を歌娘、歌娘と云ふやうになりました。お祖父さんは娘の歌の上手なことが大層自慢で他の人に讃められるといつてもはくく喜んでゐました。そして機嫌の悪い時などは、
「お前、歌を歌つておくれ、お前の歌を聴くとお祖父さんは



いつも気分がよくなるんだから。」と云ふと、歌娘は、「え、え、え、いくらでも歌ひますわ。」と云つて、楽しい歌を歌ふのでした。するとお祖父さんは、いつの間にか機嫌がよくなつてニコ／＼してしまふのです。かうして二人は毎日楽しい日を送つてゐました。このおだやかな山の村には、誰一人この楽しい二人の生活を妬む者もありませんでした。
或日のことでした。お祖父さんは森の中へ薪を取りに行きましたので、歌娘も一緒に歩いて行きました。「お祖父さん、わたしも拾ふわ。」と云つて歌娘は、相變らず美しい聲で歌を歌ひながら拾つて歩きました。その中にいつの間にか、お祖父さんを見失つてしまひました。さう大變です。娘は驚いて、大きな聲で呼んで見ましたけれど返聲がありません。仕方がないので歌娘は元来た道らしい方へ向つて、歌を歌ひながらどん／＼歩いて行きました。けれども、どうしたことがいくら歩いて里の方へ出ません。それもその筈です、歌娘は方角を間違へてしまつたのです。今更歸る道も

わからないし、それに日は暮れかゝつて來ましたので、歌娘は急に悲しくなつて泣き出しました。
すると樹の上に、一羽の鶯がそれは／＼い、聲で鳴いてゐるのに気が付きました。よく聞いて見ると、鶯は次のやうな歌を歌つてゐるのです。
森の女王の
歌姫さまは
花の御殿に
花着物
日がな一日
歌つて暮す
歌つて暮す
歌つて暮す
歌娘は今まで、こんなに美しい聲の鶯を聞いたこともありませんでしたし、それにたいへん珍らしい歌だつたので思はずうつとりと聞き惚れて了ひました。
二
「もし、もし、鶯さん。」と歌娘は呼び掛けました。「お前さんは随分歌がお上手ね。」



すると鶯は歌ふのをやめて、ちやんとした言葉でかう云ひました。

「はい、はい、私の好きな歌の上手なお嬢さん、どうして〜私などはあなた様にとても及ぶものですか。」
まア何んといふ可愛い鶯だらう、と歌娘は思ひました。そして訊ねて見ました。

お前さんの歌つた歌の女王様のゐる花の御殿では何處にあるの？」

すると鶯はさも得意さうに、ぴよんと一跳跳ねて、

「この森の奥の奥のすーつと奥にです。それはそれは綺麗な御殿ですよ。あなたの村あたりでは見ることの出来ないやうないろ〜な花が一ぱいお庭に咲いてゐます。私達の女王様は大層歌がお好きで、いろ〜な小鳥共をお集めになつて、毎日歌はせて楽しんでお出でになります。」



「まア随分楽しい綺麗な御殿でせうね。」
と、歌娘はその話につひうつとりとして云ひました。

「お嬢さん、あなたは花の御殿へ行つて見たいと思ひになりませんか。」

「え、行つて見たいわ。」

「それぢアすぐに一緒に参りませう。」
「だけど、……」と歌娘は急に考へました。それはお祖父さんのことを思つたからです。今頃お祖父さんは、きつと大騒ぎ

をして森の中をわたしを探し廻つて居るに違ひない。もしわたしが花の御殿へなぞ遊びに行つて、一日でも二日でも歸らないでゐると、どんなにお祖父さんは心配するだらうか。そしてあの老いの眼から涙をほろ〜く落して、屹度かう云ふに違ひない。

「あの娘がなくなつちや、己はもう働く張りが合ひがない。」
歌娘はさう考へて見ると、花の御殿へは行つて見たいとは思ひましたが、一時も早く家に歸らなければならぬと考へ直しました。そして鶯に向つて



「鶯さん、わたし花の御殿へ行つて見たいのですけれど、家にお祖父さんが待つてゐて心配するでせうから今日は止ませう。そしてお祖父さんにお願ひして、いつか連れて行つて戴きませう。」
すると鶯は、たいへん萎れたやうでしたが、
「それではまたいつかお供ませう。實は歌の女王様が、籠の村に大層歌の上手な娘さんがゐると云ふことをお聞きになつて、是非私に連れて来いと仰つたのです。ですから今度の次にはきつといらつしやい。女王様はあなたがお出になれば、どんなにお喜びになるか知れませんが、
「え、今度は屹度連れて行つて戴きますわ……そしてねえ鶯さん、私道が解らなくなつて困つてゐるの、鶯さん、お願ひですから家へ歸る道を教へて下さいな。」
「え、え、それはお易い御用です。」と云つて、鶯は空の方へすーつと飛び上りましたが、忽ち方角を見つけたと見えて、すぐ娘の脇の樹にまで降りてきて止まりました。
「それではお嬢さん、私についていらつしやい。」
と、云つて、鶯は靜かに樹と樹との間を飛んで先に立ちまし

た。歌娘は喜んで、小走りにその後について、歩きました。歌娘は餘り急いだものですから、次に引つ掻かれたり、草の葉に刺されたりしましたが、でも漸く森を出ることが出来ました。歌娘は鶯に幾度も「お禮を云ひ、この次にはきつと花の御殿へ行くと云ふことを約束して、鶯に別れました。その時はもう日が暮れて西の山の頂の上がほんのりと赤く残つてゐるばかりでした。もう家の近くへ来たかと思ふと、急に元氣になつて歌を歌ひ出しました。すると向うの方に幾つもの提灯が動いて「歌娘だ、歌娘だ」と云ふ聲が聴えました。お祖父さんを真先に村の人が大勢馳けてきて、口々に歌娘の無事に歸つて来たことを喜びました。分けてもお祖父さんの喜びは、二通りではありませんでした。お祖父さんは娘を見失つてから、村へ飛で歸つて大勢の村の人を頼んで探しに出掛けたのですが、見當らないので、がっかりして今しがた歸つて来た所でした。

三

家へ歸つてから歌娘はお祖父さんに森の鶯のことを

話しました。そして、是非一度花の御殿へ行つて見たいから許して下さいとお願ひして見ました。然し、お祖父さんはたいへん心配さうな顔をして云ひました。

「それは何處かのいたづらに違ひない、そんな御殿が森の中にある筈がない。お前はそんな所へ決して行つてはならぬ。」と申しました。歌娘はそれでもあんなに親切に道を教へてくれた鶯が、嘘つきだとはどうしても思へません。

「お祖父さん、わたしきつと嘘ぢアないと思ひますわ。お祖父さんがそんなに云ふのなら、私マリア様にお訊ねして見ませう。」

と云つて、娘は神様の前に膝まづいてお祈りをして、小さな聲で訊ねて見ました。然し、神様は物を仰有る筈もありませんので、お祖父さんは、

「それ御覽、マリア様は何んとも仰有らないではないか。」と云ひました。

それから幾日かたちました。娘は森の鶯の云つたことをどうしても忘れることが出来ませんでした。それらだんくと思ひ出さなくなつて、相變らず楽しい歌を歌つてお祖父さん

んと二人で暮してゐました。

或日のことでした。娘は隣村までお使ひに行つて歸つて来る途中、いつぞやの森の脇を通りますと、聞き覚えのある鶯の歌の聲がしました。そして、樹の上からかう呼びかけるのが聞えました。

「お嬢さん、お嬢さん、歌の上手な娘さん、私はあなたを待つて居りました。」

見ると樹の上に、先日の鶯かとまつてゐました。

「あら、鶯さん、此間は有難う。」と云つて娘は行き過ぎようと致しますと、鶯は遮るやうに申しました。

「お嬢さん、先だつてのお約束通り女王様の吩咐で、の御殿からお迎ひに参りました。」

歌娘は困つたやうな顔をして、

「でもねえ、鶯さん、お祖父さんが行つては許けないと云つたのですもの。」と、さもつまらなさに云ひました。

「そんなことを云つては駄目です。この間、ちやーんとお約束したではありませんか。それで私は歌の女王

様にお話し申し上げましたら、大層お喜びになつて、今日はおあなたのお出になるのを待つて居ります。花の御殿ではあなたをお迎ひしようとして、皆さんが山中の花を集めて来て、一杯に御殿を飾つてゐます。もしあなたがいらつしやらないと、わたしは玉簪からどんなお叱言を頂戴するかわかりません。どうぞお願ひですから行つて下さい。」

歌娘は、心の中では行つて見たくて仕方がなかつたので、「行つてもちぎに歸つて来られる」と、そろく心が動き出して聞いて見ました。

「え、それアいつでもお歸りになりたいとさへ仰有れば、私かまた此處までお送りいたします。」

「では私行つて見るわ。歌娘はたうとう行く氣になりました。そして口の中で呟きました「すぐにでも歸つて来て、お祖父さんに謝りさへすればいゝわ。」

鶯は何處から持つて来たか、水色の薄絹をとり出して歌娘にふわりと冠せました。すると不思議にも、歌娘は忽ち一羽の綺麗な小鳥になつて丁ひました。

「あら、私どうしたらいいでせう。歌娘は泣きさうになりま

した。

「いゝえお嬢さん、何んでもありませんよ。たいへん遠いのでその方が便利です。向へ行けばすぐに元通りになります。さあ一緒に飛んで行きませう。」

「あら、さう。娘は珍しいので却つて喜びました。そして、羽を廣げて二三度煽つて見ると忽ち空中に飛び上りました。」

さうして二羽の小鳥は森の奥へと飛んで行きました。

四

小鳥になつた歌娘は、森の上をどんく／＼飛びながら愉快で堪りませんでした。或時は綺麗な谷川の上を越えたり、或時は花の澤山咲いてゐる原の上を通つ



たりして、幾つもの森や山を越えて行くと、遙か向に山と山との間に、赤や青や白や黄色で美しい御殿の屋根が幾つも見えました。「お嬢さん、あれが花の御殿です。御覽なさい。私達を見つけたと見えて澤山の小鳥が迎ひに飛んで来ます。」

成程、空にいろ／＼な花葩を投じたかと思ふやうに、いろ／＼な色をした小鳥が美しくかたまりながら、こちらへ飛んで来るのが見えました。

やがて歌娘は多くの小鳥に迎へられて、花の御殿に着きました。池の上へふわりと降りると、不思議にも元通りの娘の姿になりました。それよりもまだ不思議なのは、一緒に来た鶯が立派な若者になつてゐた事です。おや／＼と思つて後を見ると、また驚きました。先刻迎ひに来た小鳥達は、皆んな可愛らしい男の子や女の子になつてゐ

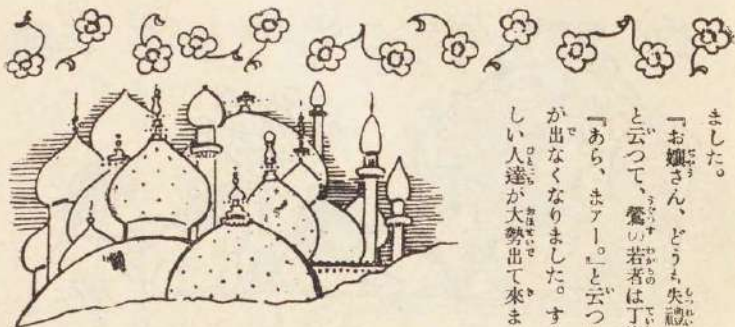
ました。

「お嬢さん、どうも失禮いたしました。」と云つて、鶯の若者は丁寧に頭を下げました。

「あら、まア。」と云つたきり、歌娘は一寸言葉が出なくなりました。すると門の中から、家臣らしい人達が大量出て来まして、

「女王様が、すぐにもお嬢さんに逢ひたいと云つて居られます。どうぞこちらへ。」

と導かれるまゝに、多くの家臣達に囲まれながら御殿の中に入つて見ますと、金や銀や水晶や黒耀石や、いろ／＼な尊い珍らしいものばかり



で、柱から天井まで飾り立てゝあるので、歌娘はその美しさに驚いてしまひ、夢ではないかと自分の腕をつねつて見たりました。然し、決して夢ではありません。御殿のみんなの廊下や柱、壁はまだ見たこともない美しい花で飾られ、床の上には董らしい花が一面に敷きのべられてその上を踏んで行く氣持のよい事例へやうもありません。やがて大廣間へ出ると、その正面には立派な椅子に女王様が掛けて居られました。

「女王様、麓の村の歌娘を連れて参りました。」と一人の家臣が申上げると、女王様はニコニコお笑ひになつて、

「お、お前さんが噂に聞く歌娘か、よく来ておくれたつたね、妾は嬉しく思ふ。」と仰せられて、家臣に命じて種々な御菓子を下さいました。そして、

「歌娘とやら、早速だが、何か歌つてくれまいか。」と云はれました。

歌娘は、顔が真赤になるやうな恥かしさを感じながら、「それでは恥かしながら一つ歌ひませう。」と云つて、娘は大好きな「山の娘は」と云ふ歌を歌ひました。



山の娘は
木の實を食べて
木の葉の着物
それでも
年頃になると
小鳥に
歌を教つたり
風に吹かれりや、
心も揺れる
心も揺れる
女王様はその歌をたい
そうお珍らしがつて、
「まあ、何んと云ふ面白
い歌でせう。そしてお前
さんは何んと云ふい、聲
でせうね。」
と如何にも感心したやう
なお讃めの言葉です。歌

娘は認められたので心の中では嬉しくなつて、外の家臣達がもう一酒歌つてくれと頼むので、また同じ歌を歌ひました。すると、今度は、女王様はじめ皆さんの者が、歌娘の歌に併せて、

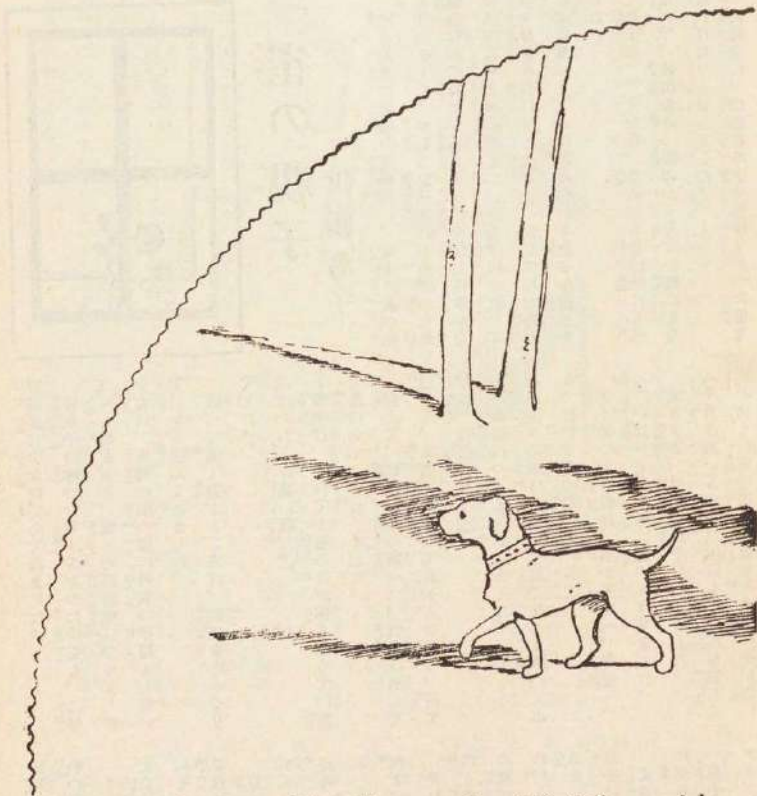
心も揺れる
心も揺れる
と歌ひました。
中には面白くなつて、踊り出した人もありました。
女王様は益々御機嫌がよくなつて、椅子を離れて立つてきて歌娘の手を取つたりしました。
それから次の間で大層な御馳走が出ました。女王様を真中にして、澤山の家臣衆が酒宴をして、皆夫々面白い歌を歌ひました。
歌娘は此處でも、さつきと別な歌を二つ三つ歌ひました
が、一つとしてこの御城の人達には珍らしくないものはないので、大層喜ばれました。
その上天性の美しい聲は、聞いてゐる人を思はず恍惚とさ



らかにゐることに致しました。
女王様も歌の女王様と云はれる位なので、却々歌がお上手でした。女王様は歌娘の来たことを殊の外お喜びになつて、それからはまるで御自分の、妹のやうにして歌娘を可愛がり毎日のやうにお庭の噴水のあたりを二人でお散歩になり、交る交る美しい聲で歌を歌つ

てみました。
さうして貧乏人の娘であつた歌娘は、今では花の御殿で女王様の次に大切な者として、多くの家臣達に敬はれるやうになりました。
毎日美しい着物を着て、美味しいものを食べて、好きな歌を歌つて暮してゐるのですから、こんなに楽しい生活は又とありません。
然し、歌娘はその内に、だん／＼と不思議に思ふやうになりました。
それはこの御殿の人達が一足門の外へ出ると、皆いろ／＼な鳥に姿を變へてしまふことです。けれども門の中では皆な立派な人間でした。
それで歌娘はこの御城の者は人間が本當なのか、小鳥が本當なのかと考へて見ますと、どちらだかさつぱりわかりませぬ。(つゞく)

(さて、可哀そうな歌娘がこの後でどうなるか、次號をお待下さい。)



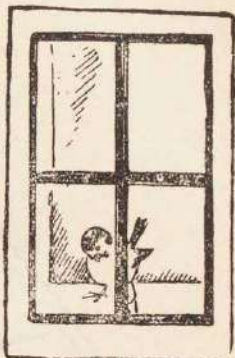
小鳥の唄に
 細い 細い
 すすきの原の
 原のかなたの
 葉末のつゆに
 赤い
 ああかい
 夕陽が落ちた



赤い 赤い
 夕陽が落ちた
 夕陽は
 海の
 かもめの夢に
 山の
 梢の

赤い夕陽

人見東明



雀の親子

伊藤温子

或る田舎の粉場の屋根裏に、親子の雀が住んでゐました。孝行な息子雀は、意地悪な母親のために朝から晩まで食物を探しに歩かなければなりません。粉場の粉が散つて時々母親の羽にでもつくると、おしやれな母親は是非良いところに住みたいと息子を困せました。

息子は、ですから、風のある日は外にも出ないで、母親の身に粉のかまらぬ様にしなければなりません。此粉場に、母親雀を少女に作りかへた様な

意地悪な少女が住んでゐました。雀親子の移つた時小さかつた少女も、二年三年と過さると、近所の悪戯娘になりました。少女は、近所の娘の様に母親の手傳もしないで朝から遊んでゐました。食べて遊ぶところは、母親雀をつくりました。

「ほんたうに良い娘だ。」と母親は、それでも娘の目が怖ろしくて、葉の蔭にかくれて云ひました。「遊んで、朝から唄を歌つて、牧場に飛んで行つて、木の實を落して食べるなんて、何だ、快活な娘だらう。」

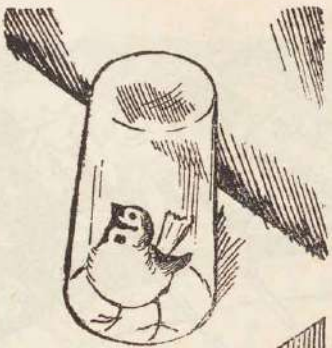
「川向うの娘は、朝から黒くなつて働いてゐる。だからあの顔の汚い事。」さう云つて母親は、木から木へ、草蔭へ、温い丘へと云ふ風に遊びまはりました。或る夕方、母親が息子に云ひました。「今日は良いものを見つけたよ、川を越して森の向うの家窓で洋服を着た男の子が白い

「娘さん助けて下さいませ。お母さん助けて下さいませ。」と叫びました。

母親は、うる／＼かたはらの木の枝に止つては息子を罵りました。「私は何と云ふ不幸者でせう。」と、息子は考へました。その夕方から母親は姿を見せませんでした。息子はせまいコップの中でもがきつゝ母親の事を思ひつゞけました。そして泣き／＼わびました。

翌朝も昨日の様に美しく晴れました。息子は母親と甘い食物を伸よく食べてゐる夢から覺めると、コップの中に昨日の様に入れられてゐました。「娘さんお助け下さいませ。」雀は聲の潤れるまで泣いていひました。泣いて泣いて跳ねまはつてゐる中、コップはひよいと引つくりかへりました。その拍子に雀は一尺ばかり飛べました。

喜んで屋根裏にかへりますと、母親は居ませんでした。どろ／＼したものを飲んでゐた。それから黄色い甘さうなものも食べてゐた。」さう云つて現僅な母親は、それが食べたいと息子にせがみました。「それは人間の食べるものです。」と云つても母親はきかないでふくれてしまひました。息子は困つたと思ひました。それはおもしろい事である事は息子も知つてゐました是非一度は母親にも食べさせたいと思つてゐました。けれども、どうして持ち運ぶ事が出来ませう。どうして取れませうか。それから幾日も、母親は怒つて他のものを何も食べませんでした。息子は泣き／＼自分の食物も探さず、森の向うの家窓のぞきに行きました。時には前子戸が下りてゐて、重さうなカーテンが室内をかくしてゐました。息子はやせる程心配しました。或朝、いつになく早起きした母親は、粉場の庭を見て息子を呼びました。息子が行つて見ると、意地悪な娘が粗末なテーブルの上に白い液體のコップをのせてゐ



プを引くりかへして、白い結つた液體を首からかぶつてしまひました。

そして哀れな雀は、コップを倒した跡によつて意地悪娘の爲に地上に仰向きにしたコップの中に入れて来ました。せまい中で息子は悲しうな聲を出して、



それから息子の雀は、森の家窓に行つて見ました。けれど母親は見えませんでした。次に母親のよく歩んだ温い丘に行つて見ました。するとどうでせう。意地悪な娘の手に握られた母親は、土に半分埋められて、息も絶々になつてゐました。「あゝ、これで食卓地雀の仕置はすんだら。」といつて、娘は丘を下つて行きました。息子はすぐに駆けよつて弱いくちばしで涙を起して母親を助けました。そして、「お母さんお母さん」と呼んでも、母親は再び目をあけませんでした。息子は泣き／＼との穴に入れて、そこを飛び去りました。そして、「左様なら、お母さん、娘さんと云つて、飛んで行きました。息子は泣いてくらんだ目の爲に固い土壁に頭をぶつけて落ちて死んでしまひました。息子雀の屍を拾つてくれたのは、川向うのよく働く少女でした。(なほり)



假面の崇り
沖野岩三郎

三六
大祭りの朝は夙から、村の人達は皆な手々にお茶碗を一つづつ持つて、山の上にある鎮守様へお詣りをするのです。
鎮守様の鳥居を潜ると、其所には八間四面の大きな拜殿があります。その拜殿の真中に、十石入りの大きな酒槽があつて、其中には濁酒が一杯醸つてあります。

村の人達は夜の引明けを待ち兼ねて、ワツシヨ、ワツシヨと掛聲をし乍ら山へ登つて行きます。そして神主様から、其の濁酒をお茶碗に一杯宛飲まして貰つて、お家へ歸るのですが、若しも家から持つて行つたお茶碗を取落して破つたなら、其一年中は不仕合せが続くと言つて、皆なお茶碗を大事に／＼して持つて歸ります。

所が或年の大祭りの前の晩でした。神主の與惣内は、家に使つてゐる若者の太七兵衛、權作、天之進の三人を伴つて鎮守の山へ登つて行きました。其晩は大變によく晴れて佳い月夜でしたから、與

惣内は三人の若者に謡曲を教へ乍ら、九十九折の坂路を登つて行きました。

もう坂を登りつめて、鳥居の前まで来た時、ふんふんと旨さうな濁酒の臭ひが、涼しい夜風に送られて來ました。

「お酒の香がしますネ。」と太七兵衛が言ひますと、「ねエ、不思議だ、酒槽にはきちんとな蓋をしてある筈だが……」と與惣内は言ひました。

「ひよつとすると、村の奴等が、お酒を盗んで飲んでゐるのかも知れない。」と權作が言ひますと、「それに違ひない！」と、天之進は相槌を打ちました。

そこで四人は足音を忍ばせ乍ら、拜殿の所へ行くつて覗いて見ますと、これは先ア何といふ事せう。真紅な着物を着た天狗が二つ、朱塗りのやうな赤い顔に、一尺ばかりの高い鼻を光らせ乍ら、細い竹の管を酒槽の中に差入れて、頻りにお酒を飲んでゐるのです。

與惣内を初め、四人の者は、餘りの事に吃驚して全身が石のやうに固くなつて足がビタリ！と土に喰つついて終ひました。けれども與惣内だけは首が自由に曲つたので、拜殿の右にある「不開庫」の方を見ますと、其の戸が開いてゐるのです。此の不開庫といふのは、昔から誰も開けた事のない庫で、此の中には天狗が鎖ち込められてゐるのだといふ傳説がありました。

四人が石佛のやうに立往生をして見てゐますと、不開庫の中から又た三つの天狗が真紅な着物を着て出て來ました。そして前と同じやうに、竹の管でお酒を吸ひ初めました。

暫くすると五天狗は何だか判らない言葉で、ひそひそと話しては、ハハハ、と大聲に笑ひました。其の笑ひ聲を聞く度に四人は自分の身體が冷くなつて行くのを感じました。そして今に、本當の石佛になつて了ふのではないかと思ひました。

五つの天狗は、鰓腹お酒を飲んだと見え、ひよろ

ひよろと踏躑き乍ら拜殿の板敷の上に坐つて手をはたき乍ら歌を歌ひ初めました。

廳で一つの天狗が踊り初めると、残りの四天狗も一緒に、手振り足つき面白く踊り乍ら歌ひました。

其の歌や踊りが餘り面白かったので、今まで石佛のやうに立竦んでゐた四人は、段々々々拜殿の方へ近寄つて行きました。けれども五天狗は、四人が傍まで來てゐるといふ事を知らないで踊り歌ひ疲れて、たうとう板敷の上に、ごろ／＼と寝轉んで、はてはグウ／＼と鼻をかき初めました。

「旨さうなお酒の香ひだなア。」と酒好きな天之進が言ひました。

「ねエ、少うしばかり飲んでみたいネ。」と權作が言ひました。

「そんな事をしては、いけない！」と言ひ乍ら太七兵衛は酒槽の中を覗きました。

「これ／＼、何をするんだい！」と叱るやうに言ひました。

「さうです、それから作之助の隣の重左衛門と軍八と……」と云つて太七兵衛、首を傾げました。

「残りの一人は誰だらう？」と言つて與惣内は急に可笑しさを堪へるやうにして、「おい／＼、御互ひも此の天狗の假面を被つて、此の朱い着物を着ようぢやないか。」

「さうしませう、さうしませう！」と云つて、四人は直ぐ天狗の装束を致しました。そして又た酒槽の所へ行つて竹の管でお酒をうんと飲みました。

さうしてゐるうちに、最初の五天狗は、いつの間にか眼を覺して、むくりと起上りますと、其所には四つの天狗が頻りにお酒を飲んでゐますので、吃驚したのしないのツて、皆なきやアツ！と叫んで拜殿の外へ飛び出しました。

與惣内初め四天狗は、聲を揃へて、「こりや、貴様達にせ天狗奴！俺達こそは不開庫から出て來た本當の天狗だぞ！」と云つて後から追

乍ら與惣内は天狗の捨て、あつた竹の管を酒槽の中に差込みました。すると残りの三人も手早く竹の管を拾つて酒槽の中へ入れました。そしてグウ／＼と喉を鳴らし乍らお酒を飲んでゐるうちに、大變酔ッばらツて來たので、いつの間にか大膽になつて、其所に寝轉んでゐる五天狗の傍で歌つたり踊つたりし初めたが、五天狗は、それをちツとも知らないで、能うく寝入つてゐました。

其うち與惣内は、不圖不開庫の事を想ひ出して、三人を誘つて、其庫の中へ勇氣を出して入つて見ますと、其所には鼻の高い真赤な天狗の假面が四つと赤い着物が四襲と、細い竹の管が四本とありました。

「解つた解つた！」と、權作は手を拍ち乍ら言ひました。

「何が解つたんだい！」と與惣内は尋ねました。

「私はあの天狗の歌に聞覚えがあると思つたよ。あれは屹度……」と權作が云ひかけた時、與惣内は、「さうだ／＼、あれは福屋の幸平と芋屋の作之助とかけました。

所が、五天狗も四天狗も皆なお酒に酔つてゐるので、足がひよろ／＼して思ふ通りに走る事が出来ません。逃げる者と追つかけるものとが、どたん、ばたんと轉がつたり起上つたりしてゐるうちに、九つの天狗が皆なごツちやに入交つて終ひました。

同じ赤い着物に同じ鼻の高い假面を被つて、皆なお酒に酔ッばらツてゐるので、お終ひには九天狗が皆な口々に、

「俺は本當の天狗だぞ！俺は不開庫から出て來たのだぞ！」

「俺は千年の間、あの庫の中に居たのだぞ！」

「俺は一萬年、あの庫の中に居たのだぞ！」などと嘔鳴り合つてゐましたが、其うちに、九天狗は皆なへと／＼に疲れて、森の中に倒れて了ひました。

所が最初の男が拜殿の所へ来て、不開庫が開いてゐるのを見た時、肝をつぶして其所へ倒れて了ひました。

次の男は酒槽の側まで来た時、其の蓋が取除けられてあるのを見て、

「大變だ！ 大變だ！」と叫びました。

「さア、不開庫の天狗が出て来たのだ！」と云つて皆なが、一生懸命に里の方へ走つて行かうとした時向うの森の中に眞紅な着物を着た、鼻の高い朱塗のやうな顔の天狗が、ごろ／＼と横になつて寝轉んでゐるのを見て、

「天狗が寝てゐる！」と一人の若者が叫びました。

魚屋の忠内といふ爺さんは、若い時お武士であつたのだが、事情あつて魚屋になつて此の村に住んでゐたのでした。此の忠内爺さんは取つても、なかなか大膽で勇氣者でありましたから、

「おい／＼騒ぐな／＼、天狗は僅かに九疋だぞ！ こつちは二三百人だ！ 心を合せて打つてかゝれ。

あの高い鼻柱を目掛けて其の茶碗を投げつけろ！ 鼻柱が折れたなら、最う天狗も人間に劣つた弱味喰になるんだ！」と命令しました。

忠内爺さんの言葉を聞いた村の人達は皆な勇氣を出して、九天狗の寝てゐる所へワァーッ！ と吠の聲をあげながら突貫しました。

驚いたのは神主の與惣内初め、九つのにせ天狗でした。

「皆の衆、待つて下され：」と云つて與惣内は天狗の假面を脱取らうとしましたが、村人の投げつける茶碗が、びゆう、びゆうと風を切つて飛んで來るので、若し假面を脱ぐと大變ですから、たうとう、村人を嚇かすつもりで、大聲に、

「こりや、無禮な事をするな。我々は不開庫に千年萬年閉籠つてゐた天狗だぞ！」と嗚鳴りますと、残りの八天狗も與惣内と同じやうに嗚鳴りました。それを聞いた忠内は聲を勵まして、

「鼻、鼻、鼻をへし折つてやれ！」と言ひながら狙



ひを定めて茶碗をびゆう／＼と投げつけました。

最う此儘にしてゐれば、生命が危いと思つた九天狗は一生懸命に森の中へ逃げ込みましたが、何さま何百人といふ大勢に取まかれて居るのでたうとう九天狗の鼻は一本残らず、茶碗を投げつけられて、ぼきり／＼と折れてしまひました。

天狗の鼻を皆な

へし折つたので、大勢はワツシヨ〜と威勢よくお宮の拜殿へ引揚げて、神主の與惣内の来るのを待つてゐました。けれども待てど暮せど與惣内が見えないので、使を神主の家へやりますと、昨晚三人の若者をつれてお宮へ出かけたとの事でした。

お正午前に神主の與惣内は、太七兵衛、權作、天之進、幸平、作之助、重左衛門、軍八、地下造の八人を引つれて山の中から出て来ました。

九人は皆な跣足を引いてゐました。頭や腕から血が流れてゐました。そして不思議な事には皆な鼻の尖が真朱に腫れてゐました。

「神主様、あなた方は今まで何所に居らッしやいました？」と忠内は眞面目な顔で尋ねました。

「私達は天狗に撮まれて山の上へ伴れて行かれました。天狗達は私共を山の上に伴れて行つて置いて、そして此所へお酒を飲みに来たらしい。お酒に酔拂つた所を、あなた方にひどい目に合はされて、皆な鼻をへし折られたと云つて泣いてゐました。」

「天へ舞上りました。けれども着物と面の皮とだけは山の中へ残して置きました。」

「そして、あなた方の鼻の尖は、なせそんなに赤く腫れ上つてゐるのですか。」

「これですか、これは其の天狗に毆られたのです。」「先ア、お氣の毒な、どうして？」と忠内は氣の毒さうに言ひました。

「天狗達は、あなた方に鼻をへし折られたのが忌々しさに、私達に此の通り敵討をしたのです。」

「それは何といふお氣の毒な事ぞう。しかし先ア天狗が退治られて嬉しかつた。」と云つて忠内は、與惣内初め九人を拜殿に伴れて行きました。そして天狗退治のお祝ひだと云つて、酒槽の中のお酒を一滴残らず、皆なで飲んで了ひました。それから皆ながへとれけに酔拂つて歌を歌ひ乍ら村へ歸つたのは、其日の夕方でした。村では子供達がトントコ、トントコと太鼓を打いて遊んでゐましたが、山から下りて来たお父さまや、お兄さま達の鼻の尖が、皆な真



與惣内も眞面目振つてさう答へました。

「あア、さうですか、其の天狗は何所へ行きましたか。」

朱になつてゐるのを見て、天狗の假面のやうだと云つて、嬉しさうに笑ひました。

不思議な事には、此日山から下りて来た人達は、一生鼻の尖が眞紅でした。殊に神主の與惣内の鼻の尖は段々と腫れ上つて、天狗のやうになりました。だから此の騒ぎがあつてからといふものは、此村では一切お酒を飲まない事に約束をしました。

所が、もつと〜不思議な事は、此の約束をして以來、若し内證で一寸でもお酒を飲んだものは、どうしたものか直ぐ鼻の尖が眞紅になるといふ事でした。で、毎年秋の大祭りの日には、其の約束を破つた爲めに鼻の尖の紅くなつた人達を車に載せて、子供達はトントコ、トントコと太鼓を打きながら、

「天狗の假面の太鼓り、トントコトン、不開庫の開いた太鼓り、トントコトン、お酒を飲んで此通り、トントコトン。」と、聲を揃へて囃し立てたといふ事です。

◆童謡 野口雨情選
九官鳥と白兔

東京 奈加嶋佳代子

金の玉子は 何を産む
九官鳥を産みました
銀の玉子は 何を産む
白兔を産みました
九官鳥は うたひます
白兔は をどります

兎のお祭

名古屋 高住 朔

兎の目玉に 灯がついた
眞赤な 眞赤な
灯がついた
「お祭やんや」とをどつてる

銀の十字架

東京 佐々木高明

地平にかすんだ教會の
象牙の塔の光るとき
雁がならんで飛びました
地平にかすんだ教會の
銀の十字架光るとき
親のない子は泣きました

おつきさん

大阪 河端 政枝

ちよいと覗いて
逃げてつた
いたづら好きなおつきさん
なんのいたづらする気やら

風と星

東京 作間 博

お山の上のお星様を
吹き落さうと
びゆうく／＼風が
あばれて吹いた

マンゴウの花環

山野虎市



昔、印度の國にカラ王といふ若い美しい王子
がありました。體格が立派で、其上に學問も智
慧も勝れたお方でしたから、いつしか自分を世界一の偉い人だといふやうな自慢
な心を起しました。

カラ王の兄様はマハ王と言つてカリンガ國の王様でしたから、弟が餘まり自
慢な心を懐いてゐるのを不愉快に思つてゐました。

或時、カラ王の所へ兄様のマハ王から一人の使が参りました。それはマハ王の
命令を受けて、自慢心の強いカラ王を縛りに参つたのでありました。けれども其
の使はカラ王を見ますと、急に可哀相になりましたので、

「王子様、私はマハ王陛下の御命令で、あなたを縛りに参つたのであります。け
れども、かうしてお目に懸ると、どうして其の優しいお身體へ繩をかけられませ
う。どうぞ王子様、あなたは片時も早く此所をお逃げ下さい。後の事は私が宜
きやうに取計らひますから。……」と申しました。

カラ王は今までの自分の所爲を大層後悔いたしました。けれども今となつて何
ともする事も出来ないで、涙ながらに住み慣れた宮殿を出て、唯つた一人でガ
ンヂス河のほとりの森の中へ逃げました。そして其の森の中の大へん景色の佳
所へ家を建て、其所で暮してゐました。

夏の日盛りでした。餘り蒸暑いので、カラ王がガンヂス河の流れに入つて、其
の冷たい水に身を浸して居りました。すると川上から流れて来た美しい花が、王
子の髪に引つかゝりました。

「おや、これはマンゴウの花だ！」と言つて、王子は其の花を手に取つて見ます
と、それは小さい花環でした。

「まあ、美しい花環だ！ 誰がこんな花環を川に投げたのだらう？」

王子は其の花環を持つて岸へ歸りました。そして翌日の朝はやくからガンヂ
ス河の岸に沿うて、マンゴウの花を尋ねながら、すん／＼と奥深く上つて行きま
した。

行つても行つても、ちつともマンゴウの木も花も見えませんでした。で、最う
引返へさうと思ひましたが、勇氣を出して又た一里ばかり登りますと、何所から
とも無く、美しい／＼歌の聲が聞えて來ました。

カラ王は不思議に思ひながら、其の聲をたよりに河岸の方へ出て行きますと、
其所には美しい花の真盛りな、マンゴウの樹がありました。太い／＼葛が幾本も

日向ぼっこ

福岡 田 籠 宗 好

日向ぼつこの影法師
長い影法師
砂に描いた人形の
足まで頭が届いた

どんぐりこ

東京 小野田 露村

山のお寺の
どんぐりこ
寝ほけて枝から
すりこけて
石段三百踏んばつした

柿の木

千葉 田島 吉太

家後の柿の木に
毎日々々鶯が来て
赤い柿の實たべちやつた

誰もたべぬにたべちやつた

和尚さん

金澤 久村 五郎

小僧さんが
お留守居してゐたら
コン〜狐が
和尚さんに化けて
納所で油揚げたべてゐた

俄雨

東京 五十嵐 仁

雨が俄に降り出した
マアちやんあわて、
駆け込んだ
皆なぞろ〜、駆け込んだ

尻切蜻蛉

東京 片山 敏次

河原に 照り〜雨が降る
河原とんぼは

其幹に巻きついて、自然の梯になつてゐました。しかも美しい歌の聲は、其の樹の上から流れ出てゐるのでした。
王子は驚き怪しみながら、其の樹の下に走つて行きますと、枝の上には天の使のやうな美しい〜お姫様が、清い流れにマンゴウの花環を投げながら、歌を歌つてゐました。王子は恐ろしく、



「もうしく、其所に居らつしやるのは、天の使ではございませんか。」と尋ねました。すると樹の上から、優しい聲で、

「私は天の使でも何でもありません、私は人間でございます。」と申しました。

「では、あなたは何所のお方でございますか。」

「私はマダ國の王女でございます。さういふあなたは何？」

「私はカリンガ國の王子でございます。」

「まア、あなたが、あのカラ王様でございますか……」

「では、あなたは、マダ國の王女ナバラタナ様でございますか。」

二人は今まで御互ひに名前だけは知つて居りましたが、出會つたのは此時が初めてございました。そこでカラ王は驚きの梯子を上つて、樹の上で王女と種々の物語りをなさいました。そして王女は両親と共にマダ國王の位を捨て、此の川奥に逃れてゐるのだといふ事を知りました。

二

翌る朝、紅い太陽が森の彼方に輝き初めた頃、カラ王は急いでマンゴウの樹のある所まで走つて行きました。そして、遙か此方から、

「ナバラタナ様、お早うー」と聲をかけますと、樹の上から、

「王子カラ王様、お早うー」と言つたのは男の聲でした。カラ王は吃驚して剣に手をかけて樹の上を見上げますと、其所には髯の長い能うく肥えた立派な男が居

尻なした
尻切蜻蛉は尻なした

こほろぎ

長野 宇野 葉月

小さい 赤ちやん

草のお家は寒いだらう

風

東京 中田 鏗之助

風 強い風

グーン グーン

かけてつた かけてつた
屋根の上を

思ひ出

三重 白駒 白夢

鶏が ひつそり遊んでた

さびしいお庭で遊んでた
子供が こつそり泣いてゐた

鶏ながめて泣いてゐた

鐘が鳴る

千葉 上原 ふく子

鐘が鳴る 鐘が鳴る

坊やのねんねする鐘が鳴る
坊やのねんねする鐘が鳴る

紋付 (小鳥の名)

愛知 加藤 春鳥

楓の葉つばが色づいた

紋付が

コッココンコンと

馬

福島 會田 眞琴

ハイどうどう

瘦せたお馬が荷をつけて

いつちら おつちら歩いてく

りました。其傍に賢さうな女の人が居ました。後の方に優しい王女が、こちらを見ながらニコくと笑つてゐました。

カラ王はヤンゴウの樹に上つて、三人に挨拶を致しました。王女の傍に居た男は王女の兩親でありました。

其日からカラ王は、王女ナバラタナと一緒に住む事になり、王女はカラ王の妃になりました。

三

カラ王とナバラタナ王女との間には、玉のやうな王子が産れました。カラ王は大變に喜んで、其名を自分の産れた國の名を其まゝにカリンガと命けました。

カリンガは大變に賢い子でした。段々と成長するに従つた、どんな大國の王權にしても恥かしくないやうな立派な人品を備へて來ました。

所がカリンガ王子の十五歳になつた春の事でした。カラ王の兄ハハ王は、急病で亡くなり、其の後嗣が無いので、残された多勢の家臣達が、弟カラ王の行方を探して居るといふ事が、森の中へ聞えて來たので、カラ王は早速、王子のカリンガを呼んで、

「あなたは、もう此の森の中で暮らす事は出來ない。あなたは一時も早く都へ出て行つて、ダンタブラの王宮に入らねばならない」と言つて、自分の指にはめて居た指環と、父王から譲つて貰つた寶劍とを與へて其日直ぐ都へ旅立たせました。

カリンガ王子が、ダンタブラの王宮に着いて、其所に居る老臣達に、父王から貰つた品を見せた時、それが宮中では今まで尋ね探してゐたカラ王の息子だといふ事を知つて、直ぐに國中にお布告を出し、國中は大祝ひを致しました。此の時を聞いて印度國內の王様達が皆なカリンガ王子を見に來ました。そして皆な王子に感心して其の家臣になりました。

カリンガは、たうとう印度全國の大王となつて、印度全國を治めるやうになりました。其の戴冠式の日には、王様達から、立派な車だとか、よく肥えた駿馬だとか、大きなく、白い象だとか、美しい狩の孔雀だとか、いろいろのものを捧げました。

カリンガはかうして俄かに、印度全國の大王となりましたが、唯一つ足りないものがありました。それは自分を育て下さつた、兩親のカラ王とナバラタナがお側に見えない事でした。で、或日の事、カリンガは、雪のやうに白い大象に乗つて、多勢の家臣を引連れて、ガンヂス河の奥に棲んで居る父王、母王を、お迎へに參りました。

白い象が四疋、一番前の象にはカリンガ大王、次にはカラ王、三番目がナバラタナ女王、第四番目の象には、カリンガ大王の、新しい皇后が乗つてゐました。美しい長い行列が、ダンタブラの王宮に還つて來た時、都の人々は皆な聲を揃へて、カリンガ大王の萬歳を叫びました。(をばり)



世界名作童話物語(その三)

家なき兒

三宅房子

一、生ひ立ち

私は捨てられた。でも、八つの歳までは自

すが、ちやうど家へ歸る途中の序があったので、首つけを頼まれたのです。私はこれからまだ二三里も行かなければ家へ歸れないし、それに晚くもなつたやうだから、これでお暇しますよ。」

かういつて、男の人が降りかけた時母さんは急に立上つて引とめました。是非もつと詳しい話を聞きたいから、今夜は家で夕飯を食べて、明日の朝早くくり歸つて下さいと、つて、母さんが頼みました。それに途中の森の中には狼が出るといふ噂もあると話したので男の人はたうとう承知してくれました。そして、その晩は、爐ばたに坐つて夕飯を食べながらその時の様子を詳しく話してくれました。

母さんの夫のシエローは足場が崩れてその下敷になつて、大怪我をしたのです。ところが、その場處は誰も行く必要のない處だったので、請負師の方では一文の薬代も拂つてくれないのです。『全く運が悪かつたのですれ。』と、氣の毒さうに男の人がいひました。母さんは、その時バリーまで、行きたいと

分にも母さんがあるものと思つてあました。私が泣けば、きつと私を抱きしめてキッスしてくれる人があつたからです。私はその人がキッスしてくれなければ、決して寢床に入りませんでした。

十二月になつて、窓の外に雪が降る晩などその人は私をしつかりと抱いて唄をうたつてくれました。私はいまだにその唄を忘れず覚えてあります。その外、私に物をいふ時の様子や、私を見る時の目つきや、私を甘やかしてくれた様子から考へて、その人はたしかに私の母さんだと定めてあました。

ところが、その人は本當は私の養親であつたのです。それがわかつたのはかういふ譯からでした。

私が幼い日を送つた村はシヤパノンといつて、フランスの田舎の貧乏な村でした。耕地が少くて、大抵は草野ばかりでしたから、何處を見ても雑草や灌木が茂つてゐて、小川が流れてあました。そして、その兩岸には牧場があつて、大きな栗の木や樫の木が立つてあました。私の家はさういふ川に沿つた小さな家でした。

いひました。しかし、それは大變なことで第一道は遠いし、お金も湖山かよります。

翌朝、母さんと私は、村のお坊さんのところへ行つて相談しました。お坊さんは、暫く考へてあました。『行くのはよいけれど、向へ行つたわけの効があるかどうか、よく分つた上にはたらいだらう』と、仰いました。

そこで、お坊さんが代筆して下さつて、母さんの御亭主の入つてゐる病院長宛に手紙を書いてくれました。二三日すると、返事がありました。それには『わざわざ、来るには及ばない。その代り請負師に談判するのだから、お金を至急に送つてくれ』と書いてありました。

母さんは、すぐ都合してお金を送りました。その後、後から一／＼手紙が來ました。どの手紙にも、もつとお金を送れといつて書いてありました。たうとうお終ひには、牝牛を賣つてそのお金を送れといつて來ました。田舎で百姓の暮しをしてゐる者には、牝牛を賣るほど辛いことはありません。百姓には牝牛ほど役に立つものがないからです。どん

八つまで私は養親の母さんと二人切りで暮してあました。母さんの夫といふ人は、薬は石工でしたが、都のバリーへ仕事に行つてゐて、村へは一度も歸つて來ませんでした。丁度、十一月のある日の暮方でしたが、私が家の前で粗糞を折つてゐると、泥ぼつけになつた一人の男が入つて來て、母さんばゐるかと言ひました。私があますといふと、その人は、戸を押して入つて來ました。その時、丁度母さんが家の中から出て來たので、『私はバリーにあるあなたの御亭主から言つて來たのですがね。』と、男の人がいひました。その言葉つきが、變つた事を知らせに來たやうなので、母さんは心配さうに、

『シエローがどうかしましたか。』と、言ひました。シエローといふのは、母さんの御亭主の名前です。

『本當にどうもお氣の毒なことに、シエローさんは飛んだ大怪我をしました。だが、あんまり心配しちやいけませんよ。怪我はしたが、命には別な人です。だから、しかし片輪にはなるかも知れません。今病院へはいつてゐます。私はその人と同じ病室にゐるため

なにつてあても、牝牛さへ何つてあればその間は位まで死ぬことはありません。スーナの中に入れるバタもとれます。馬鈴薯にかけて煮る乳もとれるのです。

けれども、今はその牝牛ともお別れをしなければならぬのでした。さうしなければ、母さんの御亭主を満足させることが出來ないのでです。

ある日、博勢が私の可愛い牝牛をつれに來ました。牝牛は自分がどうされるか知つたと見えて、牛小屋から出まいとまで啼立てました。

『後へ廻つて叩き出しておくれ。』といつて、博勢が私に鞭を渡しました。

『いけない、そんなことをしてはいけない。』と、母さんがその時叫びました。母さんは、牝牛の手綱をつかまへて、

『さア、ルセットや、出ておくれ。いゝかい。』と、優しくいひました。ルセットといふのは、私の可愛い、牝牛の名前でした。母さんに優しくいはれたルセットは、拒むことが出來ないで、すぐ小房から出て來ました。

ルセツトが往來まで出た時、博勞は馬車の後へ手綱をしばりつけました。馬は直ちに駆け出しました。ルセツトはいやでも後からついて行かなければなりません。私と母さんは、悲しい気がして家へ入りましたが、ながい間ルセツトの蹄聲が聞えてあつたのでした。これからは、朝は一切のパン食は絶えつけた馬鈴薯が唯一の御馳走になるのでした。

それから四五日たつと、謝肉祭が來ました。しかし、牝牛のルセツトがないので、乳もなければ、バターもありません。『これでは、謝肉祭も出来やしない』と、私ほうっかり獨言をいつてしまひました。すると、母さんは堪らないやうな様子をして家を出て行きました。母さんは人から物を貰ふのは大嫌ひな人でしたが、お隣りの家へ行つて、乳を一ぱい貰つて來ました。それから、外の家へ行つてバターを二塊もらつて來たのでした。

その日、母さんは私のためにおいしい御馳走をこしらへて下さいました。私は夕飯の時間の來るのをどんなに待ち遠しく思つたでせう。やがて、母さんがナイフの尖でバターを胡桃位の大きさに切つて、一切れづつ鍋の中へ入れると、い／＼いつて油を立てました。私はい／＼いつてその音を聞き惚れてゐました。その時でした。ふいに裏庭の方で人の足音がしました。誰か邪魔をしに來のだらう。お隣りの人が薪をもらひに來たのかしら。しかし、私はそんな事に氣をとられるどころではありませんでした。丁度、その時、母さんが木の匙でお皿の中のものをすくつて、バターのお鍋の中へ入れた處ですもの。



と、誰か杖で戸をこゝ／＼叩いてゐます。バターと音がしたので見ると、一人の男がわつと入つて來ました。『何だ、お祭の御馳走か』と、その男がふいにひきました。男は太い杖を片脇についてゐました。『まア、あなたでしたのー』母さんは驚いたやうに叫んで、その人のところへ飛んで行

ました。母さんは、それから私の腕を引つてつてその人の處へつれて行きました。『ルミ坊や、お前のお父さんだよ。』母さんは元氣よく私の名を呼びました。

とこみです。『さうらしいと思つた。だが、遠道をして來た俺に、まさかどら焼だけで済ますのぢやあるまいな。』

『でも、外には何にもないんですもの。まさか、あなたが歸るとは思はなかつたので。』

私は父さんだといはれたので、行つて抱きつかうとしました。すると、父さんだといふ人は、ふいに杖でもつて、私を遮りました。

『あッ、葱があるー』と叫んで、大きな杖でたゞいたので、葱が落ちて來ました。『葱が四つ五つとバターがあれば結構なスープが出来る。どら焼なんかお止めにして葱を煮ろー 葱をー』

『おい、何んだつてそんな處に突立つて見てゐるのだ。でくの坊のやうぢやないか。その間に皿でもならべろがいやや。』その人は歌をうたひました。私はあわてゝさうしうとしました。『おい、何んだつてそんな處に突立つて見てゐるのだ。でくの坊のやうぢやないか。その間に皿でもならべろがいやや。』その人は歌をうたひました。私はあわてゝさうしうとしました。

『何だー、こいつはー』と、その人は叫んで杖を振上げました。私は思はず後ずさりしました。この人は何を私がしたといつて怒つたのでせう。私は悪い事はした覚えがありません。私ばかり抱きつかうとしたわけです。私はびつくりしてその人の顔を見ました。

その人は五十位で、意地の悪さうな顔をしてゐました。その眼は怪我をしてゐるために右の眉の方へ少し曲つてゐました。片輪になつてゐる爲めか、餘計に人相が悪く見えま

した。母さんは一とことも進らばないで、御亭主のいふなりに急いで仕事にかゝりました。私があれ程楽しみにしてゐたどら焼は、たうとうおぢやんになつてしまつたのです。しかし私は口惜しいと思ひませんでした。私にもうどら焼も林檎の揚げたのも欲しいと思ひなかつたのです。私かその時、思ひつめてゐたことは、こんな意地の悪い人が本當に私の父さんなのだらうかといふ事でした。私の父さ

『今夜の謝肉祭にはどんな御馳走があるんだい。』と、その人は母さんに話しかけました。『どら焼と林檎の揚げたのをこしらへてゐる

た。』

『おい、お前もこれつばかしか食べないのか。なに、お前がくちいのだつて、それなら直ぐに床へ入つて寝ろ。床へ入つたら、すぐに眠つてしまふのだぞ。その人は怖い顔な

して、また眠りました。

私は念いで寝巻に着更へて、産床へもぐり込みました。顔を壁の方へ向けて眠らうとしましたが、目が冴えてしまつて眠れません。こんな目の冴えたこととはじめてでした。

それからどの位時間がたつたか私は知りません。しばらくすると、誰か私の寝床の傍へよつて来ました。そろ／＼と足を引つて来る様子は母さんのやうではありません。私は頬の上に温い息を感じました。

「おい、もう眠つたか」と、怖い聲でいひました。私はちつと眠つたふりをしてみました。

「もう眠つたのでせうよ。」

さういつたのは母さんの聲でした。

「あの子は、床に入ると、すぐ眠つてしまふのです。何をいつたつて、もう聞えやしませんよ。」

かう母さんがいつたので、男の人は安心してやうに話し出しました。

「お前、なぜあの餓鬼を孤兒院へやらなかつたのだ。」

「だつて、あんな小さな子を捨てることは出来ません。私の乳で育てたのですもの、可愛

「こゝろへあいつを連れて行つて相談してくる。そして家を出て行く男の足音がしました。私は産床からわく／＼と起上りました。私は目に一ぱい涙をためて母さん呼びました。『母さん、母さん、僕を孤兒院へやるの？』

「いえ、そんなこととするものか。私、母さんは私を抱きしめて下さいました。私、はうれしくつて、涙をぬぐひました。

『お前、あの人のいつた事をみんな聞いてしまつたのだらうね。』

しばらくして母さんが仰いました。

『え、母さんは私の本當の母さんではないのですつてね。...それからあの人も私の父さんではないんですつてね...』

私は母さんが私の本當の母さんでないといふのは悲しかった。けれども、あの男が父さんでないといふのは大變に嬉しかった。

『それでは黙つてゐても無駄だから、もう何もかもし話してしまひますよ。お前はあの人がある日、バリーの並木通りで拾つて来たのですよ。丁度二月の病のことで、あの人仕事に行く途中で拾つたのです。お前があんまり泣いてゐるので、捨て置く事が出来な

くつて、可愛くつて...』

『しかし、あいつはお前の本當の子ではないぢやないか。』

『それはさうですけれど、丁度あの時、あの子は病氣をしてゐたのです。だから孤兒院なんかへ連れて行く事は出来なかつたのです。そんな事をしたら、それこそ死んだかも知れませんわ。』

『一體、あの餓鬼はいくつになつたのだらう。』

『八つです。』

『ちやア、これからだつて晩くはない。』

さう男の聲がいつた時、

『いけません／＼、お前さん、そんな事しないで下さい。』と母さんが叫んだのが聞えました。それから母さんは、がっかりしたやうな聲でいひました。

『お前さん、バリーへ行つて随分人間が變りましたね。』

『それはさうさ。何しろ俺は半殺しの目にあつて来たのだから。俺はもう働くことが出来ないのだ。それにお金はなし、牛は賣つてしまつたし、俺たち二人が暮すのさへこれからは熱ぢやない。それなのに自分の子でもな

あの人以外の職人たちと相談してお前を養ふにつれて行つたのです。着物を脱がして見ると、きれいな薄桃色をした子供で、それは立派な産着にくるまつてゐたので、養部さんまでが、これは唯かに、立派な家の子を誰か盗んで捨てたに違ひない、と仰つたさうだよ。



それから、誰か世話をするものがなければ、孤兒院へやるのだけれど、何しろ、家の子らしいから世話して置けば、その内に両親が尋ねて来て、十分謝をするに違ひないとその養長さんまでが仰つたので、あの方はすつ

い餓鬼をどうして養ふことが出来るものか。』

『でも、あの子は村中で一番の器城よしなんですよ。』

『それはさうかも知れないが、全體、あいつは百姓の子ぢやない。貧乏人の子ではないのだ。だから、物も碌に食べないし、手足もあれでは働けやしない。』

『でも、もしあの子の両親が引とりに来たらどうします。』

『さア、一體あいつには確りした両親があるのだらうか。あれはもう今までに尋ねて来る筈だ。あいつの両親が来てこれまでの養育料を拂ふなぞといふ夢を見てゐたら、それこそ馬鹿を見るぜ。あいつは拾つた時には、レースのついたきれいな産着を着てゐたが、あいつの両親が尋ねて来るなぞとは考へられない。きつと、もう死んでしまつたのだらうよ。』

『いえ、そんなことがあるものですか。きつといまに尋ねて来ます。』

『すゝぶんお前は強情だな。さうすりやア孤兒院へ向けてやるばかりぢやないか。あ、話にもあき／＼した。さうだ、一時期はかり外へ行つて来よう。今日は村長さんのと

かりその氣になつて、お前をつれて来たのだよ。丁度その頃私はお前と同年の赤ん坊があつたので、二人の子供を育てる事になつて、私はお前の母さんになつたのだよ。私にびつくりした。何もかも驚くことばかりでした。』

『ところが三月目の末にね、私の子が死んでしまつたのだよ。そこで、私はいよ／＼お前が可愛くつて、他人の小供だなどといふ氣がしなくなつてしまつた。...ルミ坊や！これでお前を孤兒院へやらなかつた譯がすつかり分つたらう。』

『母さん、後生ですから僕を孤兒院へやらしないで下さい。その代り僕はどんな辛い事でもしますから。』

『あ、／＼、やるものか。だからすぐに眠ると約束をおし、あの人歸つて来てお前が起きてゐるのを見ろといけないから。』

さういつて、母さんは私にキスして寢かせて下さいました。

私は眠らうと思ひました。けれども、あんまりひどく感じたので、どうしても眠る事が出来ませんでした。(つゞく)



赤髯の神様

齋藤佐次郎

むかし、支那の杭州といふところに王といふ人があつた。ある日、朝早く起きて近所の河端へお魚を買ひに行きました。丁度魚釣りの男がゐりましたから、王はその男から二尾の鯉を買つて、土手傳ひに歸つて來ますと、途中で一人の道士にあひました。道士といふのは道教の術を行ふ人です。「もしく、王さん、その魚を私に欲しくないか」と、道士がいひました。

らに違ひないと考へました。そこで、近くに住んでゐる仙術師（魔法使のやうな人）のところへ相談に行きました。仙術師は、香をたいて靜かに坐つてゐましたが、「そんな事は何んでもない。私のところのお符を持つて行つて壁にはつて置けば大丈夫です。しかし、お符にも高いのの安いのとあつて、高い方を持つて行けばその場へ神様が現れて魔物を取押へてくれるが、安い方のだとたゞ魔物が出て行くだけです」と、仙術師がいひました。

しかし、王は魔物が出て行つてくれさへすればいゝ、なまじ取押へて貰つたりすると却つて厄介だと思ひましたから、二十圓出して安い方の黄ろいお符を買ひました。そして、それを自分の家の壁のよく目につくところへ貼つて置きました。さて、その後二晩の間は、お符のきゝめがあつて何事もなく済みましたが、三日目の朝になると、どうした譯か、黄ろいお符がバサリと剝れて落ちて來ました。そして、それなり何處か見えなくなつてしまひました。

「おや、何處へ行つたのだらう」と、つぶやきながら王は一生懸命になつて探しましたが到頭見當りませんでした。

王は見たこともない道士が、自分の名を呼んだので吃驚しましたが、よく見ると道士が、大變に人相の悪い顔をしてゐるので、「この魚ですか。それは折角私を買つて來たのだから上けられませぬ。第一あなたは道士だといふのに、何故なまぐさい魚なんか食べるのですか」と、あべこべに問返しました。「ふん……」。道士は嘲るやうに鼻で笑ひました。「くれないのか。くれないは買はうとはいはぬ。その代りに後になつて後悔したつて間に合はぬぞ。」

道士は王の顔を見てにらむやうな目をしていひましたが、そのまゝ消えたやうに何處かへ行つてしまひました。王は別段氣にもとめないで家へ歸つて來ましたが、その晩になると、屋根の瓦がひとりでにほん／＼落ちて來て壞れてしまひました。そうして、それが一と晩中つゝいたので朝になつて見た時には、家根の瓦は一枚もありませんでした。

「王さん、昨夜お前さんのうちの家根に小ぢやな鬼が五匹ゐる。瓦をはがしてゐたよ」と、隣の人が教へてくれました。王は驚いて、それはつぎりの人相の悪い道士のいたつ

すると、その晩からまた小さな鬼が五匹出て來て、王の家を壊したり、樹を倒したり、納屋をつぶしたりしました。王は困り切つて、今度は仕方なく五十圓出して、高い方の赤い色のお符を買つて來てそれをまた壁のところへ貼りました。赤いお符は、成程五十圓だけの効目がありました。その後鬼は、ばつたり來なくなつてしまひました。

二

それから一と月程たつてのことでしたが、王の長男がどうした譯か、急に親のいふ事を少しもきかなくなりまして。王は或る日、大變に怒つて、太い杖で息子を打たうとしました。息子はあわてゝ家を斷出して、外へ行きましたが、それつ切り家へ戻つて來ません。

三日たつても戻つて來ないので、母親は心配して、「きつと、短氣を起して身でも投げて死んでしまつたのだ」と言つて、おい／＼泣いてゐました。王も大變心配して息子を探しに出かけました。山の方へ行つて見たり、町の方へ行つたりして、終日、探して歩きましたが、どうしても見當らないので、がつかりして土手傳ひにとほ／＼歸つて來ました。

すると、河のふちに今にも身投げやうとしてゐる一人の少年がゐるではありませんか。その姿が息子にそっくりなので、王はあわて、飛んで行きました。それは矢張り息子でした。王は夢中で後から抱きかへました。

息子はしく／＼泣いてゐて動かうともしません。王は仕方なく興をたのんで来て、それに乗せましたが、興界はびつくりしました。

「これは驚いた。小供のやうぢやない。まるで、大人二人分の重さだ。」と、叫びました。興界はうん／＼いつて擔ぎました。息子は不思議にも、大人の二倍もの重さになつてゐるのでした。

やうやくのことに王は息子を家へつれて来たので、そうつと寢臺に寝せました。三日三晩の間何にも食はずに歩き廻つてゐたので、さぞ草臥てゐるだらうと思つたからです。ところが、息子は家へ入つた時から、急に舌がつれて唾のやうに物をいふことが出来なくなつてしまひました。そして、兩眼は赤いお符の方をぢつと見つめたまゝになつてゐます。

「あゝ、あゝ、誰か僕を裁判しに来るのですよ。あゝ怖い怖



だ。息子の命はまだつきる時ではないではないか。お前等は私の命令に従はないで、私の目をぬすんで何故あんな悪い道士の手下になつて働くのだ。不届な奴等だ。見せしめの爲めにかうしてくれる。」

い。僕はもう出て行かなければならない。」

息子は急にこんな事をいつて、ぶる／＼竈へ出しました。「おい／＼何をいつてゐるのだよ。何處へ出て行くといふのだ。お前は自分の家へ歸つて来たのぢやないか。氣をしつかりしなさい。」

王はかういつて、息子の背中をポン／＼たきました。と、その時、息子がむく／＼と寢臺から起りました。そして、夢でも見てゐる様子で、ふら／＼と赤いお符の貼つてある壁のところまで歩いて行きましたが、そこにベタリと坐つて、お辭儀をしてゐます。

息子の後を追つて行つた王は、その時何を見たでせうか。壁の前にほう／＼と白い煙が立つたと思ふと、そこへ一人の神様が現れました。金色の顔をした神様で、二つの目々ガラス玉のやうに光らせて、赤い髻を垂してゐました。神様の前には五匹の小鬼が同じやうに頭を床にすりつけてお辭儀をしてゐます。

赤髻の神様は五匹の小鬼に向つて、
「これ、お前等はどうか考へ違ひして王の息子にとりついたか

赤髻の神様は、殿かな聲でかう喚鳴りましたが、手に握つてゐた太い楠の棒をふり上げてビシリ／＼と五匹の小鬼を順々に三十づつ打ちました。小鬼どもはひい／＼いつて喚きたてました。

それが終ると、赤髻の神様はこんどは穿いてゐた鐵の靴でどうんと力一ばい小鬼どものお尻を蹴りました。五匹の鬼は氣を失つてばた／＼其處へ倒れました。

と、思ふと、また濼々と白い煙が立ちましたが、それが消えた時には赤髻の神様も、五匹の鬼もかき消すやうになくなつて息子がたつた一人そこに倒れて氣絶してゐました。王はあわて、息子を介抱しました。

息子は初めて夢から覺めたやうに立上りましたが、その時は元のやうな正氣になつてゐました。

「あゝ、有難い／＼。」

王は嬉しくて堪らないで叫びました。と、その時、ばさりと音がしたので見ると、壁にはつてあつた赤いお符が、割れて落ちたのでした。

お符の効目もそれで終つたと見えます。(をばり)

傳金の虎犬

藤澤 衛彦



日本一の大英雄勝区秀吉が、大出世の頂上から、お猿のやうなるく〜眼を、幸福さうに輝かしてなつた頃のお話でございます。

當時、大阪城中に飼はれてをりました朝鮮傳来の大虎が或日、その餌として檻の中に生たまゝで入れられた斑犬と猛烈な喧合ひをやつて、たうとう相死に死んだといふ大騒動が起りました。何せ、虎は、秀吉公御珍重の虎だといふので、虎飼係の者は大心即ち、蒼白になつて上役に訴へて出ますと、上役も驚いて益々秀吉公のお耳に入れました。ところが、秀吉は、

「いやなに、日本の犬が朝鮮の虎と闘つて共死した。めでたい、めでたい。」と反つて非常のお喜びで、早速虎飼係の者を呼んで、見たまを痛に申し上げよといふ案外の御沙汰でございます。

「はい、その犬は、白黒斑の犬でございます。」

まして、顔長く、眼大きく、脚の太つた、選しい奴でござりましたが、檻に入れますと、ほい毛を逆様にして、虎を睨んでござります。ところが、虎の方でござりますが、日來は、尾を振り、躍り上つて喜び勇むのでござりますが、あの犬には噛みかゝらうとせばず日月のやうな輝く眼にちつと見すまたま、多尾を立て、臆り戦く、驚の恐ろしさ。これは珍らしい事があるものぢや、皆來て見よと、私めが呼ばります。聲の下に、走り集つた方々も、たゞもう息を殺して見てをるばかり。そのうちに、犬の不敵な態に堪へられなくなりました。虎は、勢ひ猛く飛びかゝつて行く、犬は、さうばさせじと飛び退へ、隙を見て、われから虎の咽喉に噛ひついたのでござります。すると、虎は、左右の鋭い爪で、犬の胴體をすたく〜に引裂きましたが、犬は身體をばるばるにされても喰ひついた儘離れませぬ。虎は苦しがつて狂氣のやうに犬を搔弄る、たうと犬の首と骨ばかりが突つて、それが走り取られた時には、虎の咽喉に大穴が開いて、彼の生れも驚き果てたのでござりました。と虎飼が申し上げますと、

「それは物凄、聞ひであつたの。したが、それほどの犬、もとは何人の飼物であつたか、調べるよう致せ」との秀吉公の御命じでございます。

お話をばつて、其頃、攝津國丹生の山田といふ處に、権六といふ獵師がございましたが、或日庄屋様からのお達しで、権六の大切な飼犬を、虎の餌として大阪城へ献上したいからと認めました。権六は一旦ば代りの犬で御勤辨願ひたいと申し出ましたが、庄屋様が取上げませんので、據るなく、

「俺を恨むでないぞ、敵を取つて死ねるがよい」と、申し含めて庄屋様に差出す事に泣く泣く定めたのでござりました。すると、其夜の事、例になく其獵犬が何處かへ行く様子なので、権六の息子の權七が跡をつけに行きますと、段々庄屋様の家の方にもありますので、不審に思ひながら頼もついて行きますと、庄屋様の家の前に、庄屋様の飼犬の大判(犬の名、毛色が黄色なので此名があつた)がゐて自分の家の犬を待ちつけてをりました。そして、二匹は、近づくと、悲しまうにして、お互ひの身體をすりつけあひ、それから、「アン」

「アン」と、お互ひに一吠つつして、淋しきうに別れました。

獵師の犬といふのは、申すまでもない虎と噛合つて死んだ猛犬だったので、其後の調べによつて、其犬は無理から庄屋に所望されたといふ事がわかりましたので、其庄屋はお叱めをうけ、犬の跡甲〜といふ御せにより財寶はすべて没收され、改めて其跡目を獵師に權六に賜はりましたので、元の庄屋様は、唯一人の娘と犬の大判とを連れて山邊の方に移つて行きました。

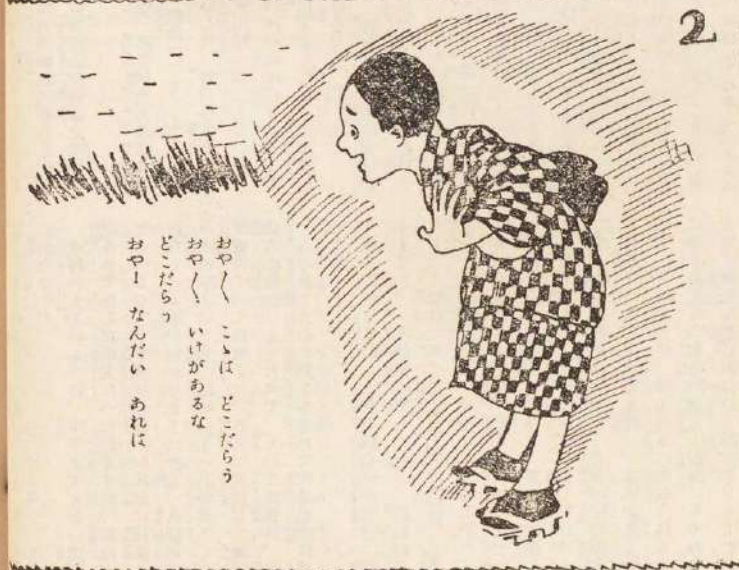
ところが或日権六の息の權七が山遊びに行きますと、一匹の虎のやうな犬が、何處からともなく駆け来て、突然權七にじやれつき、嬉しさに身體をこすりつけますので、たまげてをりますと、丁度、此犬の跡をつけて走つて來た一人の少女があつて、權七に挨拶しました。見ると、元の庄屋様の娘でした。そして、犬は、其處の大判と、自分の家の斑犬との間に生れた虎犬だと判り、それが縁となつて、少女の父は、權七の家に引取られる事になりました。金色の虎犬も勿論、そのお供として權七の家に飼はれる事になりました。

1 テンポ
ほくのほのゆめ ふぶき



おたからなしい
てねてことしの
はつゆめにうんと
えんぎのいゆめ
なみないなア
じてんしやと
くうきじうと
モーターボートと
一べんにかつて
もらったゆめ
でもみないな

2



おやくこもはどこだらう
おやくいけがあるな
どこだらう
おや！なんだいあれは



3
やアかしかもかも
かしかもかも
とりたいなみんな
とりたいな
てつぼうはおとが
して いけない
ほてな
うまいぞく
いゝかんがへがある



4
きか はやくしてくれ
たまへにげちまつちや
つまらないぢやないか
これで もぐつて いつて
いちばのこらす いけどり
にするんだ きみたち
にも わけてあげるから
はやくおほいそぎ

5

たしかこのへんとみづのそこ
からうへをみるとあること〜
おなかとあかいあしがたたくさん
みえる



あしをつかんで、つぶり〜
ひつぱりこむ

7

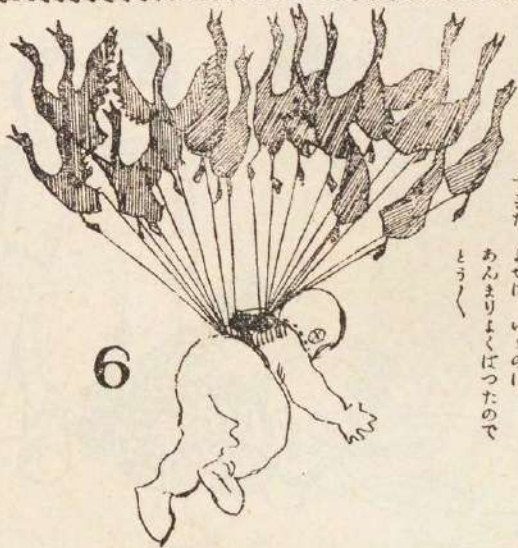
みづのうへまで ひつぱり
あげられ たたくさん
に なかまが たたくさん
あつまつて
こつ〜
こつ〜
こつ〜
こつ〜
こづきまはされ



六四

いきになつて、つぶり〜 ひつぱりこむである
うちに、だん〜 たたくさんになると、かも
がうきあがらうとするので、あしがうい
てきた
よせば、いゝのに
あんまりよくばつたので
とら〜

6



おれぼうにいさん
はやくおきなさいよ
あら、いやだかも〜
だつて

にいさんおき
ないとはなな
つまむよ

8

つあふん、ねぼすけ
にいさんだな
みんな、で、つツついて
やらう、まだ、ねごと
な、いつてよ



六五



かくれ玉

志村照子

昔、ある村に権六といふ心のよくない男が居りました。ある時、権六は隣り村に用事が出来て、朝暗いうちに家を出ました。やつと東が白んだばかりで、村の家は一軒も起きてゐませんでした。空には明けの明星がまたゝいてゐるばかり、本當に静かな朝でした。権六は村境の坂を上りかけたところで、古い樫木を一本拾ひました。その時、坂の上から天狗様が下りて来ました。権六は何んと思つたか、いきなりその樫木を目にあて、

「あゝよく見える。おや京都も見える。大阪も見える」と、大きな聲でいひました。天狗様はびびりして、権六の顔を見つめて

「天狗様は、権六からうけとつた樫木を目に當てましたが、いくら見ても京都や大阪どころか、何も見えません。おしまひには、高い木のぼつて見たのですが、やっぱり何も見えないので、はじめて権六にだまされたのを知つて、大腹怒りました。そこで、小豆餅と大きな粉餅を澤山に持つて権六の家へ出かけて行きました。ところが権六の家には、茨が一ぱい置いてあるので入ることが出来ません。

仕方がないので、持つて来たお餅を家のまはり投げて、

「かうしておけば、権六は家から出る事が出来ないから、今に死んでしまふだらう」と、安心して山に歸りました。後で権六は、馬鹿な天狗様のことを笑ひながら、大好きな小豆餅ときな粉餅をお腹いっぱい食べました。それから暫くたつてのこと、村の庄屋様の家にお客がありました。いつか一度はためしに見たいと思つてゐた権六は、夕方になるのを待ちかねて、例のかくれ玉を鼻の穴に入れて、家を出ました。道で逢ふ村の人達は、権六のゐるのを知らずにいづつてしまひます。権六は大ざらで庄屋様の家の門をくぐりました。成い玄關には大勢のお客様の下駄が揃へてありました。奥の方から、賑やかな話聲に笑ひ聲さへまじつて聞こえます。何んとも云はれないおもしろな御馳走の味が鼻をつきます。権六はその庭木戸を開けて中にはいりました。菓山をこえて、泉水の橋を通ると、廣い立派なお座敷の前に出ました。そこは、まるで眞寔のやうに燈がともつて

おもしろいもので、あまり面白さうに方々眺めてゐるものですから聞きました。 「おい、本當によく見えるのか？」 「え、本當ですとも！ 京都の町も、大阪の町も、江戸も長崎も、手にとる様によく見えるのです。」と、目に樫木を當てたまゝ権六が申しました。 「一寸俺にそれを貸して呉れぬか？」と、天狗様が頼みましたが、権六は首を振つて、 「いゝえどうして！ これは私の大事な寶です。人になごめつたに貸せるものですか」といつて、なか／＼貸しません。天狗様はさういふと、偷見たくてたまらないので、暫く考へてゐましたが、とう／＼「それで、暫く私の持つてゐる寶物ととりかへてはくれまいか？ この寶物はかくれ玉といつて、鼻の穴に入れてあると人から姿が見えなくなるといふ、不思議な玉なのだ」といひながら、一寸の小さな玉を出しました。権六はそれを聞くと、「占めたッ」と思ひましたが、表面はさも困つた様子をしながら、 「それぢやあ仕方がありません、その玉と取りかへて上げませう。」

へながら今度はおさし方を一切つまして口に入れました。ところが、おやくみに入れてあつた山椒が、あまりからかつたものですから思はずしらす。 「ハッ！ 何と」と、大きな聲をしてしまひました。すると、どうでせう。その拍子に鼻の中のかくれ玉がほんと飛んで出ました。 さあ大變！ 今まで少しも見えなかつた大きな男が、お座敷の真中ににや／＼と坐つてゐるではありませんか！ お客様達の驚きは一通りでありません。権六は怒り大勢の人に揃つてしまひました。(終り)



流罪になるまでの頼朝

窪田空穂



とも、不思議にも命が助かりました。一度は、親の仇である平家を亡さうと思つて、伊豆で軍を起したが、負けて、石橋山の朽木の洞へ隠れてゐた時です。いま一度は、父の義朝を初め、兄弟の大方の者が殺されてしまひ、自分も平家の囚となつて、もう死罪と定められ、その日までもきめられてしまつた時でした。その時の頼朝は、あなた方とほゞ同年の、十三の暮から十四の春へかけての時で、今だと小學生の年頃です。

この、十三から十四の年へかけて頼朝の上につつた事件は、それは勇ましい、そして悲しい、ちよつとには云ひきれないやうな事柄です。それを今から手短かにおはなしませう。

二
頼朝が十三の年の十二月の二十七日でした。父の義朝は、今日のこの一と軍で、平家を亡して清盛の首を取るか、それとも自分の首を敵に渡すかといふ命懸けの大軍を始めました。時は二條天皇の御代で平治元年です。場所は京都で、此方は天皇の御所を本陣とし、敵は六波羅の平氏の邸を本陣としました。

軍の起りは、その時の朝廷で勢力のあつた藤原信頼といふ人と、入道信西といふ二人が仲が悪く、何方も一方を殺さうと思つてゐました。そして信頼は義朝を身方に附け、信西は清盛を身方に附けてゐました。先に軍をしかけたのは信頼の方で、清盛の高野山へお詣りに行つた留守に、信西を殺してしまつて、驚いて歸つて来た平氣を待ちうけて、今日のひと軍に亡はしてしまはうとしたのです。

源氏の軍勢は三千騎でした。大將は義朝で、自分の子供で軍の出来る者は残らず、それに親戚の者は

もとより、關東から連れて来てゐる家來はみんな率ゐてゐました。子供といふのは、惣領の悪源太義平これは十九でした。次男の中宮大夫進朝長、これは十六でした。それに三男の右兵衛佐頼朝、これは前にも云つた通り十三でした。頼朝は幼くはあつたが父の義朝の氣にいられてゐまして、今日の初陣には先祖の八幡太郎義家の着た産衣といふ鎧をもらつて着、同じく義家の指つた鬘切といふ刀をもらつて差してゐました。

軍は御所で始まりました。敵の大將の清盛は六波羅を守つてゐて、惣領の重盛が、二千騎を率ゐて攻めて来ました。重盛と戦つたのは義平で、それは目覺しい戦ひをして、幾たびも重盛を殺さうとしました。頼朝は父の側にゐましたが、先頭へ進んで、名を擧げて敵に向つてゆき、敵の二騎を射殺し、一騎に疵を負はせました。

御所での軍は源氏が勝ちました。源氏は六波羅へ攻めてゆき、平家の邸の門の内までも亂れ入つて戦

ひました。しかしその時には、源氏の方は朝からの戦で、もう持つてゐた矢は射つくしてしまつてゐました。體も疲れてしまつてゐました。平家の方は新手です。源氏の先頭になつて戦つてゐた義平が、かなはなくなつて門の外へ退くと、勢ひが挫けてしまつて、もう盛り返すことは出来なくなつてしまひました。

大将の義朝は口惜しがりました。「負けたとなつては家の疵だ 討死をしよう。」と云つて、先頭になつて引返ししましたが、家來が無理に引止めまして、「一と先づ關東へ落ちて、新しい軍勢を率ゐてお上りになつて、この恥はおすゝぎなさいまし。」といつて、無理に義朝を落すことにしました。

義朝は、僅かの軍勢を率ゐて、近江の國の方へ落ちました。その途中の大原口まで來ると、落人を殺して甲冑を取らうとする、二三百人の僧兵に檔まされ、又龍華越まで來ますと、同じく四五百人の僧兵に檔まされました。何れも戦つて敗つて通りました。

十三の頼朝は、初めて甲冑をつけて、朝からはげしい戦をしたので、すっかり體が疲れてしまつて、氣を勵まし勵まして、つい坐睡が出るのでした。義朝を先に立てた他の七騎は、夜の闇のなかを落ちてゆく時なので、誰もそのことに氣が付きませんでした。

暫くして頼朝は目が覺めました。見ると自分たゞ



が、今度は、伯父の陸奥の義隆は射殺され、次男の朝長は、左の股を射られて疵を受けてしまつた。琵琶湖に沿つた堅田まで落ちると、義朝はひと休めました。そこまで持つて來た伯父の義隆の首を、自分で湖水へ沈めました。そして、二十何人かの大將の家來に暇をやりました。

「かう大勢が一しよでは、目に附いてとても道が通れない、別々に落ちろ。又關東で一しよにならう。」と云つて、別れないと云ふのを、叱つて別れさせました。後に残したのは、三人の子供と四人の家來で、僅かに八騎だけでした。

その時はもう夜になつてゐました。八騎の者は、關にまぎれて、また往還を落ちつゞけて行きました。

三

同じ近江の野路(草津の邊)の邊まで來た時でした。頼朝の乗つた馬は、次第におくれ出しました。それは頼朝が馬の上で坐睡をはじめたからでした。

一人で、前にも後にも誰も見えません。夜は更けてきて眞暗で、道さへ分りません。頼朝は心細く思ひながらも一人で落ちて行きました。すると、向うの方に宿が見えて來ました。それは近江の森山の宿でした。

森山の宿には、落人があつたら討取れと、平家から命令を受けた者が大勢居ましたが、その者たちは、少し前に、義朝の連中の通つて行く馬の足音を聞きつけて、多分落人だつたらう、今度來たら討取らうと用意してゐました。その中の一人の、源内兵衛眞弘が、一人で落ちて行く頼朝を見かけると、腹巻を附け、長刀を持つて駆け出して來て、頼朝の乗つてゐた馬の口をつかまへて、「落人があつたら留めろといふ、六波羅からの仰せです。」といつて、頼朝を抱き下さうとしました。と、頼朝は鬚切の太刀で、抜打に切りつけました。眞弘は頭から二つに割られて倒れ

ました。後から續いて来た今一人は、「馬鹿者めが」と云つて、馬の口に取附くのを、同じやうに切ると、今度は、腕を切り落してしまひました。

これに懲りて他の者は手を出しませんでした。その際に頼朝はそこを駆け抜けて、安河原まで來ますと、頼朝を捜しにと引返して來、鎌田正家と逢ひました。それは、この先の篠原堤まで行つたところで、義朝が初めて、頼朝の後れたのに氣が附いて、「可愛さうに、後れてしまつた。敵に生捕られぬといゝが」と心配されたので、正家は「捜して參りませう」と云つて引返して、佐殿（頼朝のこと）は居ますか。」と闇の中を呼び／＼來たのでした。

二人は急いで義朝に追附きました。そしてあつた事を話しますと、義朝はその勇ましいのを褒めて、「この場合、大人でもさうは出來ない。よく行つた。」と云ひました。

「だかう。」と云つてゐました。頼朝はあわて、逃げ出しました。

浅井の北郡（近江）へ行つて休んでゐた時でした。年寄つた尼が頼朝を見かけて、氣の毒がつて家へ連れて行つてくれました。その家には年寄つた夫もゐて、一緒になつて大事にしてくれたので、そこに正



四

義朝は東海道を下つて行かうとしましたが、不破の關所は、敵が固めてゐて通れないと聞きましたから、道を變へて山際の方を落ちて行きました。此方は伊吹山の麓になつてゐるので、雪がだん／＼深くなつて來て、馬では歩けなくなつてしまひました。それで馬を棄てました。徒歩になると鎧を着てはゐられませんから、それも脱ぎ棄て、しまひました。

頼朝は、馬のうちは一しよに歩きましたが、徒歩になると、次第に後れだしました。たうとう又、連中からすつと後れて、夜になつた頃には、連中の後姿も見えなくなつてしまひました。

その中に頼朝は、雪路を踏み迷つてしまつて、山寺のある小さな村へ入つてしまひました。或家の軒下に休んでゐると、家の内の話聲が聞えて來ました。「こゝへも落人が來るかも知れない。武士でも雪の中では働けまい。捕へて、六波羅から御褒美をいた

月中にありました。雪が消えたので、又出懸けました。前の村は通るまいと思つて、谷川へ沿つて下つて行きますと、そこに鶺鴒をしてゐる男がゐりました。

「人目を忍んで入らつしやるやうですが、有りのまゝにお話しなさいませ、何方なりとも、入らつしやる所まで送つて上げませう。」と云ひました。

「美濃の青墓まで行かうと思つてゐる。」と頼朝は本當のことを云ひました。

「それでは、そのお姿では、人目に着いて駄目です。」鶺鴒の男はさう云つて、頼朝に女の着物を着せました。そして、鬚切の太刀は菅に包んで自分が持つて、男が女を連れて旅をする風に變へました。

頼朝が青墓へと云つたのは、その宿には父義朝の妾になつてゐる延壽といふ者があつて、父は其所へ寄る譯だと思つたからです。鶺鴒の男に連れられて、頼朝はその家に着きました。義朝は其家へは寄つたが、直ぐに尾張の野馬長田忠致の家を指して落ちて行つたことを聞きました。忠致といふのは、家來の

鎌田正家の勇にあたつてゐる者でした。頼朝は又、かういふ事も聞きました。上の兄の悪源太義平は、飛騨の國にゐる家來を呼び集める爲に其方へ行つた次ぎの兄の中宮大夫進朝長は、甲斐と信濃にゐる源氏を呼び集めるやうに命けられて其方へ行つたが、龍華越で受けた矢疵が、伊吹山の麓の雲路を歩いた爲に痛み出して、とても行かれさうにもないと云つて、途中から引返して來た。義朝はその臆病なのを怒つて、そして敵に生捕られるのは可愛さうだと云つて、自身で殺してしまつたといふことを聞きました。

父の様子を聞くと頼朝は、鬚切の太刀を延壽の家に預けて、直ぐに父の跡を追つて出懸けました。頼朝はたゞ一人で、廣い關ヶ原を落ちて行く時でした。

向うから大勢の武士の此方へ來るのを見懸けました。見附かつては悪い、と思つて頼朝は直ぐに側にゐつた數の藤へ身を隠しました。

來かゝつた武士は、清盛の腹ちがひの弟で、尾張守をしてゐた平頼盛の家來の彌平兵衛宗清といふ者でした。そして今大勢の下役の者を連れて、京都へ行かうとしてゐる途中でした。

頼朝の姿は隠れる前に、もう宗清の目にとまつてしまつてゐました。宗清は心の中で、この邊には珍しい小綺麗な若者だつた、隠れるといふのは變だ、捜して見ようと思ひました。そして武士たちにそこを捜させました。

藪が浅いので、頼朝は直ぐに見つけられて捕へられてしまひました。

宗清はその若者を見ると、それは顔を知つてゐる兵衛佐頼朝でした。

宗清は、思ひがけない手柄をしたので大喜びでした。

頼朝はたうとう宗清に連れられて、京都の六波羅の平家の邸へ行くことになつてしまひました。

人魚の海

秋庭俊彦



或る晴れぬとした夏の朝、ヂツクと云ふ漁夫の若者が、港の岸邊で、煙草をぶか／＼吹かしながら、海の景色を眺めてをりました。ちやうどその時太陽は遠い山の蔭から昇つて、晴い海の面がきら／＼と緑色に輝きはじめ、ヂツクの口から出る煙草のけむりと同じやうに朝霧が渦をまいたりうねつた

りし乍ら谷間から消えて行きました。ヂツクは脛からパイプをはなして、靜かに光つてゐる遠い大洋の方を見わたしながら、

「何てまあ美しい景色だらう。あんなに好い景色を、誰れも話し對手なしにながめてゐるのは詰らないなあ。自分一人で物を云つてゐるのは寂びし

いものだな。あゝ俺はかうやつて何時までも一人ほつちで暮らしてゐなければならぬのか知ら。」とヂツクは獨り言を云つて悲しさに笑ひました。でも、お嫁さんをもちつたら、こんな寂びしいことはないにちがひない。世の中でお嫁さんのない人間は、ちやうど空つほの壘や片方しか及のない鉄みたいに不具もおんなじことだ。ねえ、さうぢやないか。」とヂツクは誰か人に物を云ふやうに、浪打ち際に突き立つてゐる大きな岩に向つて話しました。

するとその時、その岩の直ぐ下のところに、年の若い、美しい一匹の動物が、海と同じやうな緑色の髪の毛を梳いてゐるのがヂツクの目に留まりました。ヂツクはびつくりしました。

ヂツクは今までに一度もこんな生物を見たことはありませんでしたが、これは人魚だと直ぐに覺りました。それはかうした海の動物が水の底へ潜る

時に使ふ魔法の帽子が、真き側の渚のところに置いてあるのを見つけたからです。人魚はこの魔法の帽子がなければ海の底へもぐることは出来ない話に聞いてゐたので、その帽子を見るとチツクは大急ぎで其處へ行つて、魔法の帽子をそつと盗みとつて、隠してしまひました。人魚はチツクの発音をききつけると、しづかに此方を振りかへりました。

人魚は自分の潜水帽子のなくなつてゐるのに気がつくつと、ほろ／＼涙をこぼしはじめました。そして生れて間もない赤ん坊のやうな優しい聲で、悲しさに泣きました。チツクには人魚の泣き出したわけはよく分つてゐましたが、でも魔法の帽子を出してやらないで、人魚がどうするか見てゐてやらうと思ひましたけれども、此方を見詰めてゐる人魚の顔が涙ですつかり濡れたのを見ると、可哀相でなりませんでし

ら、ごや私をどうしやうつて云ふの。チツクは不意に、この人魚をお嫁に貰つたらどんなだらうと考へました。この人魚が大へんに美しいばかりでなく、本當の人間と同じやうに口が利けるので、チツクはこの人魚の娘がすつかり好きになつてしまつたのです。チツクのことを人間さんと呼んだその言葉附まで氣に入つたので、チツクはもう心の中で、人魚をお嫁さんにすることにきめました。

「人魚さん、人魚さんー 私はね、お前を私のお嫁さんにしたいと思ふんだが、お前は厭かい。」とチツクはやさしく云ひました。

「まあ、さうですか、あなたがご希望なら私はあなたのお嫁さんになりますよ。私はいつでも宜うございます。でも、私が髪を結つてしまふまで待つて下さいな。」と人魚は云ひました。そして長い間かゝつて綺麗に髪を結

た、チツクの國の人はいつたいに、誰れでも優しい者ばかりでしたが、チツクもかう云ふ可哀相な様子を見ると、外の人達と同じやうに大へんやさしい心持ちになりました。

「そんなに泣くなよ。」とチツクは云ひました。けれども人魚はわんばくな赤ん坊のやうに一層わあく／＼と聲をたてて泣きました。

チツクは人魚の傍へ腰を下してなだめてやるつもりで人魚の手をとりました。その手には指の股に家鴨の足に似てゐるのと同じやうな水掻きがありました。それは卵の白身と殻との間にある薄皮のやうに柔らかい白いもので、少しも醜くはありませんでした。

「お前の名前は何て云ふんだね。」とチツクは人魚と話をしようと思つて、かう訊きました。けれども人魚は何とも答へませんでした。人魚は口がきけないのか、それとも自分の云つたことが

ひました。きつと見知らぬ人達の中へ連れて行かれて、みんなに姿を見られるにちがひないと思つたからです。お化粧がすむと、人魚の娘は自分の衣兜のなかへ櫛をしまつて、岩の下に頭をこめて、海に向つて何から物を云つてをりました。

その聲はまるで、風がさら／＼と鳴るやうに海の上を渡つて、大洋の方へ傳はつて行きました。それを聞くと、チツクは驚いて云ひました。

「お前はいつもさうして海と話をするのかね。」

「え、さうですよ。」と人魚は氣にも留めない様子で云ひました。「私は今お父さんにね、先へ朝御飯をたべて下さいつて云つたんですよ。私のことを心配するといけませんから。」

「そしてお前のお父さんに誰れだね。」とチツクは訊きました。

「おや、あなたは私のお父さんのこと

分らないのかとチツクは考へましたので、自分の心持ちを分らせるために、人魚の手をそつと握りしめました。それは優しくしてやると云ふしるしです。魚でもこの優しいしるしのわからない筈はないからです。

人魚はこんな風に優しく話しかけられるが氣に入らない様子でした。そして急に泣くのをやめて、チツクの顔を見上げながら、

「人間さん、人間さん、あなたは私を食べようと思つてゐるんでせう。」と云ひました。

「いや、飛んでもない、何でお前はそんなことを訊くんだ。お前のやうな美しい魚を食べるなんて、誰れがそんなことを思ふものか、こんな氣持のいい朝、綺麗に髪を梳くお前の美しい頭の中に、どうしてそんな意地悪な考へを越すんだよ。」

「人間さん！ 私を食べないつもりな

を話に聞いたことがないの。私のお父さんは海の王様よ。」

「ちや、お前は王様の娘なんだね。」とチツクは自分の花嫁の姿をよく見ようと思つて目を隠しながら云ひました。

「あ、そんなら私がお前のお嬢さんになれば、お前のお父さんのお蔭で出世が出来よ。お前のお父さんは海の底に沈んでゐるお金をたくさん持つてるだらうね。」

「お金ですつて？ 何のお金。」と人魚は訊きかへしました。

「何より有難いお金のことさ。」とチツクは答へました。そしてお前が云ひつければ、魚共は何でも持つて来るだらうね。」

「え、持つて来ますとも。魚共は私の欲しいものは何でも持つて来ますわ。」

「ちや隠さずに話をしますが、私は貧乏で家には好い寶物もないし、道具もないし、王様の娘をお嫁さんに貰ふのに

私の家にあるものちや餘り汚ないから
お前道具を取り寄せて呉れないかね。」
「え、取り寄せますよ。私は綺麗な



貝細工の道具をたくさん持つてゐます
から。」
かうしてチツクと人魚の娘は夫婦に

なることに話がきまつたので、二人は岩づたひにチツクのお父さんの住んでゐる村へ連れだつて行きました。そしてチツクはお父さんに相談しました。するとチツクのお父さんは怒つたやうな氣むづかしい顔附をして、
「人魚の娘をお嫁さんにするなんて、飛んでもない話だ。俺はそんな事は承知しない。あの娘を海の底の家へ歸してしまへ。」と云ひました。
チツクはその時人魚の持つてゐた魔法の帽子を手に下けてをりましたが

ました。「冗談を云つてるひまに出世が出来るんですよ。」
「む、それなら相談をし直さなければならぬ。」とお父さんは答へました。「成程それやお前がそんなに云ふのも無理はない。金を持つてるなら何故先にさう云はないんだ。ちや、この娘が魚だつて構はないから、お嫁さんにしても宜しい。こんな貧乏暮らしでお金と聞けば何よりも有難い。ところで俺が承知してやつた代りには、俺の處へもお嫁入の土産に金がたつぶり貰へるんだらうな。」

かう云ふ風で話はきまつて、お父さんは人魚をチツクのお嫁さんに貰つてやりました。そしてチツクと人魚の娘は、仲の善い人間の夫婦と同じやうに喜び合ひながら、また岩づたひにチツクの住居へ歸りました。
チツクの家はやがてだん／＼とお金持ちになつて、チツクは大へん仕合せ

になりました。人魚の娘は立派な好いお神さんになつて、二人とも仲よく暮らして行きました。
お神さんになつてから、人魚の様子

はびつくりする程變りました。毎日せつせとよく働いてゐました。三四年経つ中に、一人の女の子と二人の男の兒とを生んで、一生懸命に子供たちの世話をしてをりました。
チツクはほんとに仕合せな男です。ですからよく氣をつけて、この喜ばしい仕合せを失くさないやうにしなければならぬのでした。けれども人間と云ふものは、少し仕合せに馴れるとほんの一寸した怠り心から、大事な仕合せを失くす人が多いものです。
或日のこと、チツクはトラリーと云ふ可なり遠方の村へ行かなければならぬ用事が出来ました。チツクは何時

お父さんに怒られたので、その帽子を人魚に返してやらうとしました。けれども又考へ直して、

「でも、お父さん、そんな事云はずにどうぞお嫁さんにもらつて下さい。この人魚は海の王様の娘なんです。」

「いくら王様の娘だつて、魚ぢやないが。魚をお前のお嫁さんにする事は出来ないよ。」

「けれどもお月様のやうに美しい優しい娘なんですから。」とチツクは再び云ひました。

「お月様や星のやうに美しい優しい娘だつてやつぱり魚の娘ぢやいけない。」と、お父さんは怒つてチツクを叱りつけました。

「でもこの娘は海の底に沈んでゐるお金を持つてゐますよ。ですからこの娘をお嫁にすれば、そのお金をもらふことも出来るし、出世することも出来るんです。」とチツクは夢中になつて云ひ

の間、漁の道具をかまはして見ることもあるまいと思つて、そのまゝ出かけてしまひました。

チツクが家を出たあとで、お神さんの人魚は家の中を綺麗に掃除して、漁の道具や網を片づけてをりました。すると、その網の置いてあつた後の壁の破れ穴に、以前自分のかぶつてゐた魔法の帽子の入れてあるのが目に入りました。

人魚はそれをとり出してつくづく眺てをりましたが、その中に自分のお父さんのことや、母さんのことや、兄弟のことや、姉さんや妹のことを思ひ出して、海底の國へ歸つて見たくなりました。

お神さんの人魚は小さな椅子にぐつたり腰を下して、昔海の底で樂しく面白く暮らしてゐた時分のことを夢のや

うに思ひ出してをりました。
それから又小さい子供たちのことを考へたり、優しい夫のチツクのことを思つたりして今若し自分が海の底へ行つてしまつたら、チツクが、どんなに悲しむだらうなどと考へてをりました。

「でも久しく別れてゐたお父さんや母

さんに會ひに行つて來たい。少しの間ぐらゐる家を留守にしても、直き歸つて來れば、チツクさんだつて、何とも云ひはしないだらう。」
と、お神さんの人魚はお終ひにかう思ひました。
到頭人魚は戸口へ出て行きかけましたが、不意にまた後戻りして、搖籃に



八〇
眠つてゐる可愛い、子供たちをちつと眺めて、そつと接吻しました。
そして、少しの間涙をほろ／＼こぼして泣いてゐましたが、やがて一ばん年上の娘に向つて、これから自分はちよつと兩親のところへ行つて來るから、その留守の間、よく兄弟の世話をしてやつて、みんな仲善く、おとなしくしてゐるやうにと云ひ聞かせました。

人魚はそれから岩のある處へ行きま

した。
海はちやうど上潮時だ、太陽の光にきら／＼輝きながら油を流したやうに靜かに滑らかに連なつてをりましたその海の面を眺めてると、お神さんの人魚には、深い／＼水の底からうつとりするやうな歌の聲が聞えて來て、早くお出でと招いてゐるやうな氣がしてなりませんでした。

そしてなつかしい思ひ出に胸が一ぱいになつて、いつかチツクのことや子供たちのことも忘れて、手に下けてゐた魔法の帽子を頭にかぶると、その岩から海の中へ勢ひよく飛びこみま

した。
チツクは日の暮れ方に家へ歸つて來

ました。
妻の姿が見えないので、一ばん年上の娘に訊いて見ましたが、娘はお母さんの行つた先を知らませんでした。

隣りの家へ行つてきゝますと、お前のところのお神さんは、も少し、さつきがた奇妙な帽子を手にかけて、岩のあるはうへ出て行つたと、云ふことでした。

チツクはそれを聞くと慌てゝ家へ歸つて魔法の帽子を探して見ましたが、それが失くなつてゐましたので、お神さんの人魚が海の底へ行つたことを知



りました。

それから、何年も／＼、チツクは、人魚のかへつて來るのを待つてゐました。

しかし、何時まで経つても歸つて來ませんでした。
「きつとお父さんの王様に引き留めら

てゐるのだらう……でも、子供たちを想ひがつて、今に歸つて來るにちがひない。」

と、チツクは思ひました。

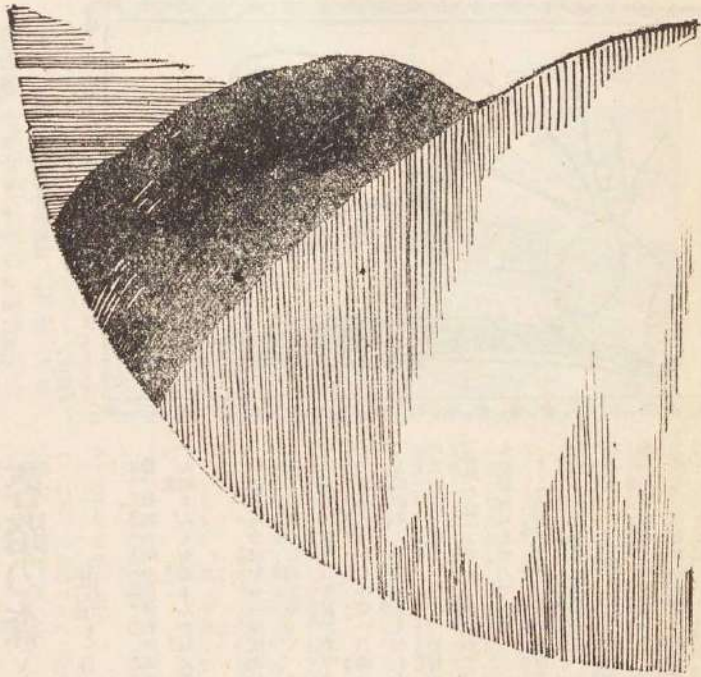
そしてもうお嫁さんは貰ひませんでした。

チツクと一緒に住んでゐた時分、人魚はそれは／＼優しい善いお神さんでした。

そしてもう歸つて來なくなつてからは、チツクや子供たちが朝夕岩礁のところへ出て、美しい海を眺めてゐますと、靜かな浪の音にまじつて、水の底の方から何とも云へない優しい歌の聲がきこへて來ました。

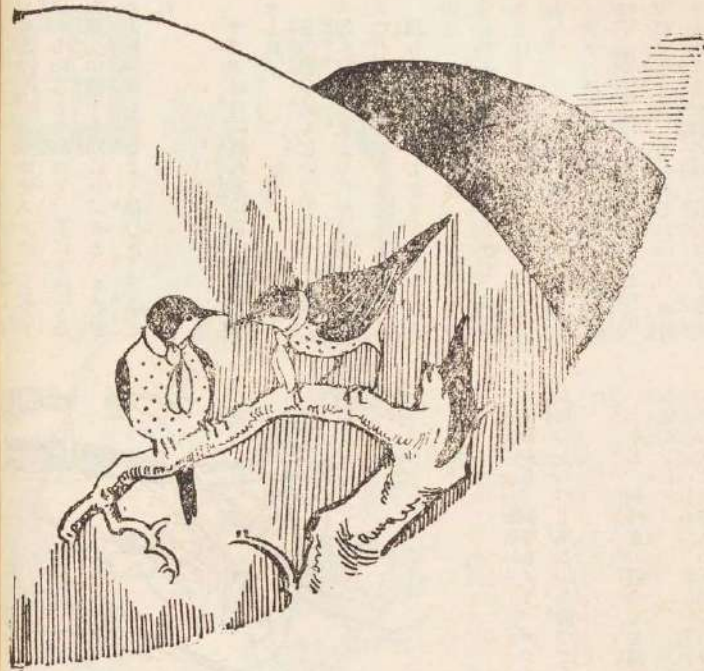
それはきつとあの人魚が、自分の子供たちを想ひがつて、やさしい子守唄をうたふのでせう……。

(をほり)



呼子鳥よこどり

かつぼん かつぼん



呼子鳥よこどり

野口雨情

子供が めたかと

呼子鳥よこどり

かつぼん かつぼん

呼子鳥よこどり

子供は お山の

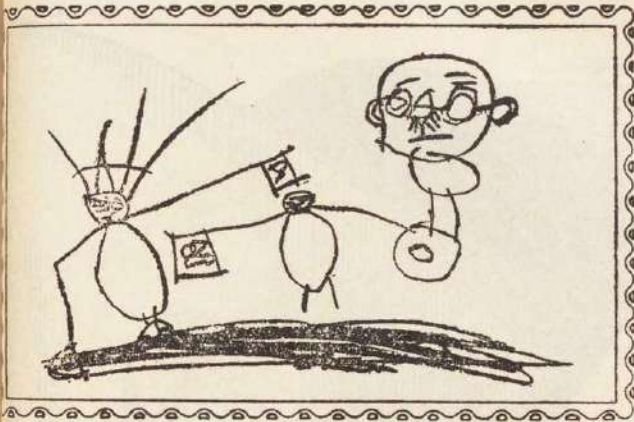
霧の中きりなか

子供は 谷間の

霧の中きりなか

子供が めたよと

呼子鳥よこどり



暮路の森 (入選)

笹原とり子

昔、羽前の國の片田舎に正直で貧しいお爺さんとお婆さんが住んで居りました。

お爺さんの家から一里ばかり山奥にこんもり茂った森があつて、その森の中には荒れ果てたお社がありました。杉や檜の大木が枝を交へた森の中は晝でも暗いのに、時々名も知れない怪しい鳥が鳴きますので、近村の人達は「暮路の森」と呼んで怖がつて、近よるものがありませんでした。

ところが或る年、あの正直で評判のお爺さんが毎日「暮路の森」へ入つて行きました。お爺さんは、森の中のお社を一生懸命直してゐました。行ちたまになつてゐたお社が、間もなく出来上つた時、お爺さんはお社の前に跪いて、

て、一心にお祈りをしてゐました。お爺さんは、何を神様にお願ひしたのでせうか。

この國は一體に雨が少いので、いつも田植の時になると、水に不足を告げてお百姓達は困つてゐました。沼は山の奥にも、村の近所にもありません。ですから、何處の村でも雨を待つて、田植をしなければなりません。それで、今年も、もう田植時だといふのに、一滴の雨も降らないので、どこの田もカラ／＼になつてヒヤ／＼がいつてゐました。この有様では、その年は一粒のお米も出来さうにありません。

そこでお爺さんは、どうかして雨を降らせたいと思ひました。しかし、人間業では何うする事も出来ませんから、この上は神様にお願ひしようと思ひ、お婆さんと相談の上、怖いことも忘れて「暮路の森」のお社へ毎日お詣りするやうになつたのでした。

それからは、どんな日でも缺かさずお爺さんはお詣りをしてゐました。しかし、一向にそのお社が見えませんでした。お日頃は朝晩とお爺さんが言ひましたが、子供達は一向にきません。

中でも一番の饑鬼大將らしい子供は、いきなり蛇の尻尾をつかんで、

「そらッー」

と叫びながら釣下げて、わざとお爺さんに見せびらかすやうにしました。

「雷がたつていゝや。餘計なお世話だ。」

と、饑鬼大將がいひました。

さうか、でも可哀想ぢやないか。それなら私にくれないか。」

「嫁だ。これから皆なでもつと／＼弄つてやるのだ。」

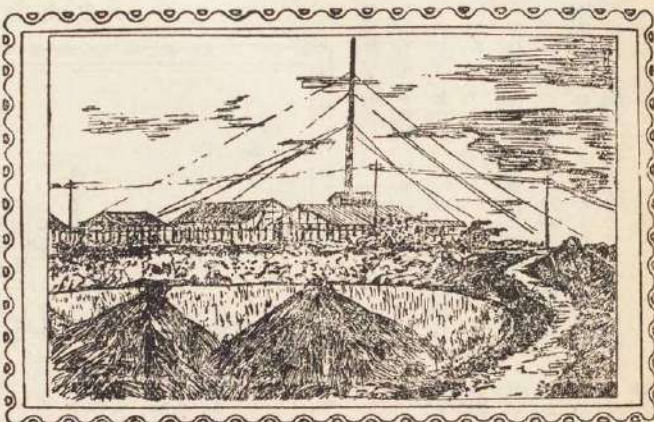
子供達は小蛇を釣下けたまゝ向うへ行きかけました。

お爺さんは堪らなくなつて、ふところの財布を探りながら、

「これ／＼待つてくれぬか。それでは私がお金を出して買はう。」

といつて、呼びとめました。

子供達は、お爺さんが金をくれるといつた



一匹の小蛇が半殺しの目にあつてゐるではありませんか。

「これ／＼お前等は何をしてゐるのか可哀さうに生物を苛めるもんぢやないぞ。」



春小橋土 一尋校學小色一九上縣梨山

ので戻つて来ました。お爺さんが若干のお金を出すと、子供たちは喜んでお爺さんに小蛇を渡して、またわい／＼いつて山道を歸つて行きました。

小蛇は、あわて、藪の中へもぐり込みました。それからお爺さんは、いつもの通りお社へお詣りを済して歸つて来ましたが、さつきのお爺の傍を通り過ぎようとした時、後の方で、「お爺さん、お爺さん」と不意に呼ぶ聲がしました。お爺さんは誰だらうと思つて、振り返つて見ますと、きれいな少女が立つてゐます。白

い滑物を着て、右手にきら／＼光る玉を持つてゐました。お爺さんは吃驚しました。「これは神様に違ひない。」さう思ひましたから、あわて、其處へ坐つて、平伏してしまひました。「お爺さん、そんなに驚いてはいけません。私は先刻あなたに助けられた小蛇の姉です。弟を助けて下さつて有難う。」少女がいはりました。お爺さんは驚いてゐたので、一と首も口を大きくことが出来ません。少女はまたいひました。「神様はお爺さんが毎日このお社へ祈つてゐる事を御存じです。それでお爺さんに差上げられるものがあるのです。」少女はさういひ終ると、手に持つてゐた寶玉で藪の中をカツと照しました。すると、不思議にも、藪の中から一人の童子が小さな瓶をか／＼へてのこ／＼出て来ました。童子は少女の前まで来ると、丁寧にお籠儀



(五十) 彦恒 邊渡 村泉平郡井西縣手岩

なしました。少女は童子から瓶を受取つて、それをお爺さんに渡しました。そして、「お爺さん、これは寶の水を入れた瓶です。これを上げますから、大切に持つてお祈りなさい。」と、いひました。お爺さんは夢中でお辭儀をしてゐましたが、しばらくたつて頭を上げた時には、不思議にも少女と童子は消えたやうにゐなくなつてゐ

ました。お爺さんは夢ではないかと思つてほんやりしてゐましたが、少女から貰つた瓶だけはそこにちやんとありました。「今の少女は神様のお使ひ姫に違ひない。」さう思つたお爺さんは、社に向つて幾度かお辭儀をして不思議な瓶をか／＼へて立上りました。途中まで来た時、お爺さんは考へました。「一體、この瓶には何が入つてゐるのだから

う。さう思ふと、見たたく／＼堪らなくなつて、こぼ／＼蓋を開けて見ました。その途端に瓶の中からわ／＼と清水が溢れ出たので、あわて、蓋をしてしまひましたが、瓶から出た水は、見る間に廣がつて小さな沼のやうになりました。お爺さんは雀躍りして喜びました。「あ、有難い／＼。私の願ひが叶つた。」と、幾度か叫びました。そこで、お爺さんは、道々、瓶の水を滴していくつもの沼をこしらへたので、沼の水は忽ち低い方へ川のやうになつて流れて行きました。そして、カラ／＼になつてゐた村中の山へ一ぱいに水が入りました。村の人達の喜びはどんなだつたでせう。之といふもお爺さんのお蔭だといつて、村の人達はお爺さんを神様のやうに敬びました。この後、この村にはどんな日照りが降りても、決して水に不自由する事がなくなりました。お爺さんがこしらへた沼は、未だに青々とした水をたゞへてゐます。(なほり)



詩年幼
選水牧山若

やなぎ (賞)

茨城県眞壁郡 大貫校尋常四 関 口 松 子

川のへりの
やなぎんとこさ
日ぐれになつと
ちひさいちひさい
ばけものでちちけ

評、何といふ鄙びた可笑しい優しい歌でせう、よみ返してゐて涙を覚えます。(牧水)

お月様 (賞)

東京府東中野橋 長尾その子
東京府東中野橋 長尾その子
小學校三女

夕日がしづんだ
お月様出た
今ではばかり

まだ白い。

評、まだく白いまだ白い、十三なよつにいつなるか。(牧水)

煙 突

福井縣大飯郡 高濱校高二 伊藤藤三郎

雨のシト／＼降る中に
屋根の上で煙突が
細い煙を出して居る。

評、これはまた静かな青い様な色をした景色だ。(牧水)

大 水

茨城県北相馬 郡養生校尋常四 坂巻やす子

パツシヤン
パツシヤン
大波うつて

向ふの方からこつちまで
水がゴツコとおして来る。

評、パツシヤン／＼いふ音が耳の近くに聞えます。(牧水)

も ん ず

千葉縣東金 小學校尋常六 秋葉幹一

もんずもんずが鳴く時な

綴 方

編輯部選

英久丸 (賞)

福井縣大飯郡 高濱校高二 石橋岩藏

單衣を一枚着てぶる／＼ふるへながら
濱へ出て見た。英久丸はほん／＼ほんほ
ん煙を出しながらちつとしてゐる。何だ
らうと思つて、船の先を見ると船長さん
と機関長と二人だけできばつていかりを
上げてゐられる。北風が吹いて、船は磯
の方へ流される様になるので、機関長は
急いで機関室へ入つたと思ふと、ほんほ
んと云ふ音は、一そう大きい音になつて、
ともの水を白くして、スクリユウがまひ
出した。船はそろ／＼動き出したと思ふ
とばたつとやんだほん／＼と云ふ音もい
つしよにやんだ。船の先では船長さんが
一人きばつてひいてゐられる。機関室か
ら出て来た機関長は船の先の方にあるほ
うを取つていかりの上つて来るのを待つ
てゐる。すぐにそれをばかして、船長室

出て行つた。又先に持つてゐたほうを取
つて待つてゐる。それから船は右の方へ
右の方へとまがつてゐた。先に般長室へ
入つたのはかぢをまけに行つたのに違ひ
なかつた。なんほ待つてゐてもいかりが
上つてこないで、又どん／＼走つて機
関室へ入つて馬力をかけた、其の時も少
しの間で止んだ。機関長が出て来るとす
る／＼上つて来た。さつき持つてゐたほ
うをすぐに取つて、かけてひきやり上げ
た。又次のいかりを上げようとしてゐら
れる。

今度も中々上らないので機関室へ入つ
て馬力をかけると、綱をひいてゐる人は
早く引いたが大分あまつた様になつた。
其の時はすぐに上つてしまつた。船を動
し出したと思ふと今度はもう沖へ出て行
てしまつた。

沖へ行く時船より大きい波が来るので
英久丸は波の上へちよいと乗つたり、逆
さになつたり、立つたり、かくれたりし
て、岩にかくれてしまつた。

おばあさん (賞)
千葉縣木更津 小學校高二 山口丈子

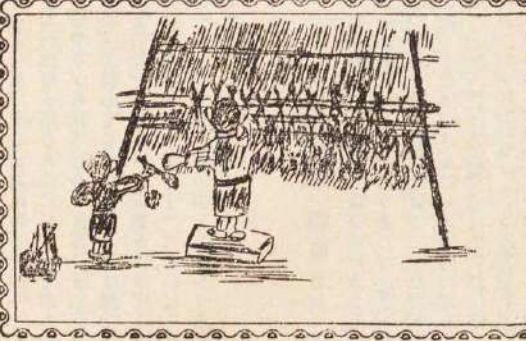
自由畫「妹」

東京市外千駄ヶ谷小學校尋常六 吉村光子



へ入り體をねぢる様にしてゐる。大きい
波が来て船を乗せる様になるとかぢは右
の方へぐいとまがつてゐる。すぐ走つて

私の家の前のおばあさんは口の悪い人
であります。ある日私が前の家の裏の所
へ行つて兎を見て居りますと其の所へお



自由畫「きびかけ」
福井縣高濱小學校高二

長岡岩雄
八九

すりつほを
よこかして鳴く
みんなこい〜と
すりつほを
よこかして鳴く

評、これも松子さんと同じく土地の言葉で
歌つてあるのがたいへんに面白い。
(牧水)

もみぢの葉

山梨縣小淵澤
小學校尋常六 清水 發 廣

赤いもみぢの葉が
ゆうべの風で
わらさきになつた

雨に降られてまた赤だ
評、實際の景色をよく見てゐるんでなくて
はこの歌は出来ません。(牧水)

話

福岡縣高濱
小學校高二 柴田 勘三

「大昔爺様と婆様があつたとさ。……」
話さかずにねてしもた。
評、ねぼすけかんぞと、ふくらがなきよし
た。(牧水)

ゾウ

東京市外橋園
小學校一男 長尾港 太郎

ゾウノミミハ
ハンケチダ。

評、かう短刀直入にやられると、とてもか
なはない。(牧水)

馬

山梨縣小
淵澤校尋常四 小澤 桂

おとうさんど〜へゆく
きいてるまに
乗つたる馬は
ひん〜とんでつた。

鐘が鳴る

東京市深川
小學校尋常四 旗平 トキ

夕やけこやけ
お寺の鐘が
しづかにきこえる。
きのふ見たこじきの子
今はどうして居るだらう
又もお寺で鐘が鳴る
あれ〜お寺で鐘が鳴る。

ばあさんが赤ん坊をおぶつて「ねんねん
よ早くねろよ」と大きな聲で歌ひながら
来ました。そして私が兎のそばに立つて
見て居ますと「おたけちやんおれん所の
兎は大きいつべ毎日何度おれが草を入れ
てやつたかしのれないよ、だから怒り大き
くなつて来たよ」と言つてじまんして居
ました。毎日草もやりもしないでそんな
事を言つて居ました。毎日裏の方へおし
こんで白い兎が眞黒になつて居ました。
夕方になつてうちの鶏が前の家の庭で遊
んで居ました。するとおばあさんは「こ
の畜生めおれん所の庭が汚くなるよ」と
言つてすぐそばにあつた下駄をほうり
つけました。すると鶏はコケッコココと
鳴きながらかけて行きました。足にあた
つたのかびつこを引きながらうちへ歸つ
て来ました。おばあさんは變な顔をして
私が行くとかくれてしらぬふりをして
居ました。そうして「おめんとこの鶏は
うるさくつて〜こまるよ」とどなりつ
けました。私は餘りにくらくらなつたの
で「だつておめん所の鶏だつて始終うち
へ来て色々の物をたべたりうちのへ入

おはつさん

茨城縣眞壁郡 篠崎まつ江
若柳校尋常六

おはつさんは「五錢だ〜五錢で四本四
本」と俺がにわけのわからぬことを言つ
てます。俺は「いゝな赤くてこれ五錢ぢや
安いなだれがもあんめいこんないゝの」と
ほめてやりました。おはつさんは「ま
つ江ちゃん赤くてよかつべ」とびつけた
口をきいて居ます。俺が「いゝや俺らほ
しくなつちやた」とわざと言ひました。
おはつさんはうれしくて「ハハハハハハ
ハハハハ」と笑つて居ます。その下駄を
ちやらこん〜とわざとすつて歩つて居
ます。

ひよこ

鹿児島縣掛指宿 紺屋 清藏
郡大成校尋常四

私のうちのひよこは、おかあさんが米
をついたりして杵の音が、とんと一つ聞
えるとすぐうちの竹やぶからはしつて來
ます。そうしてこぼれたものを食べて居
ます。一しやうけんめいになつて食べて
居ます。私がひよこをつかまへようとす
ると、おやどりが出て来て尾をさかへて
私をつくらうとします。やめてしまは
うとしてゐるうちにけしてしまひます。

こぼろぎ

東京市寺島
小學校尋常四 西垣 榮孝

こぼろぎはよくえんの下やどぶにゐま
す。昨晚私が庭でかいちう電氣をもつて
あそんで居たら、こぼろぎがす〜しい聲
で鳴きだしたので、かいちう電氣をつけ
てこぼろぎをつかまへやうと思つてもな
か〜つかまらぬ。ちれつたくなつた
からふしてしまつたが、妹が取つてくれ
といつてきかないので、こんどは、ちや
うちんをもつてつかまへにいつたら、す

おひる

神奈川縣川崎 村上清夫
小學校尋四

山の上で休んでると
向ふの會社でゆけふいて
ビーとおひるの汽笛が鳴つた
するとつゞいてドンが鳴つた
方々ちや今頃こはんだら。

アリンボノ子供

千葉縣東金 村井貞治
小學校尋六

アリンボノ子供が
一三四モグラモチノ
穴ノマハリデアソソデキテ
二匹アナン中へオツタラ
アトナアリンボガ
アナン中へハイツタ。

南京チャボ

新潟縣金津 植木倭女文
小學校尋二

ナンキン
コメヤル
コトナイタ
コソソライクト

コトナイタ。

よその家

名古屋市愛知 大井繁一
小學校高二

よその家へ行つて
お客様になると
いやらしい様で
おかしな気がする。

魚釣り

埼玉縣長野 中村直治
小學校高二

川岸に一人の老人魚釣り
煙草をくはえて魚釣り
一匹釣れて嬉れしがり。

でんき

山梨縣北巨摩郡 清水五郎
多摩小學校尋五

向ふ村のでんきとつ。
よくひかれ、
こちららはらんだ。

たき

兵庫縣美濃郡 奥野静生
志染校尋六

ぐに二匹ばかり取れた。それをかこの中へいれて、きうりをやつたがながく、なかない。その中にやうやくなきだした。その聲があまりすずしいので私はなんともいれない。

ひかうき

秋田縣河邊郡 鈴木久美
岩小學校尋四

昨日の朝禮に校長先生が今日は九時ごろに佐藤章といふ人がこつちのはうにひかうきでくるとおつしやつた。私はうれしくてたまらないので、教室にゐてもひかうきのことばかりかんがへてをりまいた。そのうちにかねがなつたのでおもてに出てゆきました。さうしてみんなそろつてねさき山にゆきました。いつてからあそんでました。そして花をとつたり、又いちごをとつたりしてあそんでゐたら、ひかうきがきたときけふので、はしつて行つて見るとこゝにゐたかわかりませんでしたがよく見るととんほがとんでゐるやうに見えました。それに目を離さずにゐると、段々近づくときほど大きくなつてきました私の見てゐる前を通つた

栗さし

新潟縣中頸城 村ミヨ
郡妙高校尋五

今日祖母さんから栗を買つていたよきました。夕はんをたべてる前にゆでて、ごはんをたべてからさしたりたべたりしました。私達ははりに糸をつけて、競争で栗さしをしました。祖母さんは一等で私は二等になりました。みんなさしたら六七ふさになりました。あとののこつたのはみんなで一しよにたべました。それからさした栗を火だなへかけました。すると祖母さんやお母さんは其の栗を見て此の栗はよくほされぬ中にみんなたべてしまふだらうといつてゐました。栗がほされると大さうまうございませす。私はくりが早くほさればよいと思ひます。

汽車にひかれた人

愛知縣海部郡 樋口喜一
彌富校尋五

から歸つていらつしやいましたので、にをあげて、鐵橋の下に舟をつけて、そのばんはその舟にお父さんはねられた。朝おきてはとばの小屋でいろ／＼話をしていらつしやいました。そのうちに一人の大人の人が、やあ／＼鐵橋の下へ血がたら／＼と流れてゐるといはれたので、僕のうちのお父さんはさつそく鐵橋の下へ見にいかけた。するとあたまがわれて、なうみそが一ぱいそこらにあるやら、そこはきたなくてたまらないんだから一さんにかけ出した。するとお母さんがもうごはんだといはれたから、たべにかゝるとその死人のことを思ひ出してもうたべられぬ。それから一ぱいばかりたべて、それから學校へ行きました。さうすると學校でもどこでも、汽車にひかれたといつてはなしをしていらつしやいます。それから三四日はそれのことを思ひ出すといやらしくごはんはたべられませんでした。それからもう汽車にひかれたのは見に行かぬときめました。

車をひく馬の話

大坂府天王寺師範學校附屬小學校尋四 太田ミチ子
私はいつもおもしろい荷車をはこんだりする馬です。此の頃はすこし荷物が多くなくなりました。私はなぜよい馬にうまれてこなかつたのかと思ふとかなしくなります。昨日私が南河堀町の方へ行きました。そうすると小さい子供が澤さんをつりました。そこへ私とおなじぐらゐる馬がやつてきました。にもつものなにもひいてをりません。たゞせなかに一人の人間がのつてをりました。見たことのない美しい顔で、おふろへいつたやうにつやがつや／＼出てをりました。そしてあしおと高くほか／＼はしつていきました。私ははらがたつたので、車をひいたなりきたないなりをして少しはしりました。私にはしるとなにもほか／＼しません。たゞきたないやほか／＼といふどころの音がしました。まごさんはおこつてこらこいつといつてとめました。そこらにゐた小さな子供は、あばれ馬きたといつてにけました。又或人はあばれうまきました。私はちやん、などといつてをりました。私は

どたんばたん
不動山のたき
たぐさん水が
おつてゐる。

兎

大阪府西成郡
長尾校尋五 八木金次郎

兎がつくと
坐つてゐると
いたづら犬が
「兎のせむし」と
笑つて逃げた。

さ

茨城県眞壁郡
若柳校尋五 吉田五郎

おらじのさくは
死んちやつた
やせてゝ死んちやつた
ほんとにさくはかはいさう。

キノコ

山梨縣北巨摩
郡多摩校尋五 丸茂滋雄

ムシニクハレテアナゲラケ。

うちのひよこ

岐阜縣掛梁郡
大和校尋三 末長君子
ビヨビヨひよこがないて居る
かごにふせたらよけなくが
それでもふせなとねこが来る
なくなよなくなお米やる
これをたべたらもうなくな。

ネズミ

東京金富小学
校尋常一年生 山田アキラ
タンスノスミニ
ネズミガチヨツト
カホゲシニケリ。

手紙

愛知縣知多郡横須
賀町百十七番戸 村瀬米一
明日は村の
お祭よ
春ちゃんおいでのと
手紙に
書きました。

人間がにけたので、よろこんで又あたり
まへにしました。けれど人間がにけた時
あばれ馬などといったあれはへんだな
あ、と思ひました。それから私たちのあ
つまる所へ行き、となつてゐる仲間のも
のに、今日あつたことを話しました。友
達のいひますには、馬の仲間でも色々あ
ります。第一私たちのやうに、荷物をはこ
んだりする馬もあれば、又戦争の時へい
たいをのせる馬もあれば、又あたりまへ
の人間をのせる馬もある。又一番えらい
のは、この國の 天皇陛下のばしやをひ
く馬もあると友達がいひました。それを
きいて、何ですかほろ／＼なみだが出て
きました。

栗もぎ

千葉縣東金
小學校尋四 小安 三平

「この木がよかつべき。かうよつちやん
が言つたので見ると、みどりの葉の中か
ら針のかたまりのやうなのがたぐさんな
つてゐる。

よつちやんがのほると、おきちやんや
中田君がつゝいてのほつたので、僕もの
がなによりもおかしいのである。ことに
おかしいかほをこしらへるのは、えらい
人のことを知らせるときである。ある時
は人をたぐまねをしておかしにするの
である。

貝ほり

山口縣柳井
小學校尋二 小早川 菊枝

私はひろしけのをばさんと、川本のお
ばさんと、にいさんととばへ貝をほり
にいきました。そのときは、しほがひい
てをりましたから、はだしでおきの方へ
でてかひをほりよると、私が一ばんはじ
めほつたので、ここには貝がをりますと
いふと、をばさんがそこをほつてあり
ました。さうすると、かひがたぐさんで
たので、をばさんがとつてでありました。
それからまだつつとおきへりました。私
の足もとをほるとおもしろいかひがほれ
たと私がにいさんにいふと、それはま
ぐりですとにいさんがいって、ありまし
た。それから川本のをばさんがそこをほ
つてと大きなはまぐりが二つでました。
私はかひをたぐさんほつたので、はあい

ほつたけれども僕は木のほりはからつて
たなので、途中からつるつるとすべり落
ちた。それでほらないでもいで居るの
を見ながら、いつものおしやべりをほじ
めた。上でも一生懸命しやべりながら、先
の細い枝などへ行つてばつくりなのをさ
がして葉をつけたまゝ、投げた。よつちや
んは外の木にもほつてもいだ。しばらく
くするとよつちやんが「あんまりとつと
お父さんにおこられるから、そんなんと
んねんしべ」と言つた。すると中田君は降
りてきて、僕におつた所を教へてもらつ
た。草の中からさがしており道でけたで
ぶんなぐつて顔をしかめていがをむいて
ゐる。二つばかりむいて三つ目頃に僕は
すけてやつた。五つぐらむくとよつち
やんとあきちやんがおりてきた。四人で
竹でいがをむいてそれをよつちやんにや
つたら、自分のと二人に分けてくれた。

僕等の先生

秋田縣河邊郡
聖岩校尋四 武藤 環

僕等の先生は、よく僕等を笑はせる。
そのうちで、先生がかほをこしらへるの
のう（かへらう）といひますと、いにま
せうといつて、ありましたから、みんな
でいきました。

秋の私の家のせう

山形縣新庄
小學校尋三 眞砂 彦一

今日はいよいよお天気ですから、いつもや
とつてゐる半さんにおばあさんがいねの
かりわらをほしておくれと言つたので、
なやからわらをかついできて、せどちゆ
う一面にほしました。
すこしよこには鳥小屋があります。わ
らのほしたのを見つけたのでせう。小屋
の内であちらこちらへまはつてゐたらう
少しのすきを見つかつたと見えて一羽と
び出ました。つづいて三羽とび出ました。
いねのかりわらの所へ走つてきて、足で
わらをかまはしてみさをさがしてゐまし
た。
コスモスも美しくさいてゐます。
物ほしさをにはじゆばんも着物もほし
てあります。
去年はすこしもならないみかんは今年
はすすのやうになつてゐます。



信 通

一月の自由畫

山本 鼎

▲今度ば一年生やまだ學校へゆかない人達のに面白いのがありました。

▲三宅正克君の「サカナチルトコロ」も、土橋小橋君の「ハチノス」も面白い畫です。

稚さい子の畫は言葉のやうなものです。まはらぬ舌で説明して居るが、實際に感じて居る事を云つて居るから其處にはいつも彼らの生活が語られて居ます。

▲長岡岩雄君の「きびかけ」は少しぞんざいだが、面白味のある畫です。

▲吉村光子さんの「妹」もいゝですが、顔のわりに肩から手へかけての描き方がお手軽です。

▲渡邊恒彦君の「僕の家のランプ」もよく描けてゐます。線形的になりやうに想像の風致を

地の點で歌ひ出されてそして腕に自然な面白味を持つたのだ。もし強ひて油っこい土地感を濫用するといふことにでもなれば、恐らくひどい臭氣を帯びたものになるだらうとおもふどうか、眞似はせずに下さい。

とにかく、各地方の立派な少年少女諸君が小生の前に集つて、てんで自分の歌を大きな聲でうたひあげて聞かしてくれてゐる様な幸福を感じながらいつもこの選に當る。いつか自分自身もその中に混つて手を振り足を動かしてゐる様な昂奮を覺えるのだ。その昂奮はまた容易に眼の前に起つてゐる歌の輝の澄みと濁りとを聞き分ける直覺を誘ひ出して來る様だ。うまいまづいより先づ私はこの純と不純とを見分けてその純を探らうとする。子供はほんたうに子供らしくかれ、そしてそのほんたうの聲をあげよと常に思ふのだ。(十一月八日、落葉の庭に編の聲しきりなる午後。)

新年號の綴方

選 者

新年號でも、綴方は別に變つたものもありません。まあ可もなく不可もなくですなア。もつと諸君、勉強して下さい。なんでも澤山書いて下さい。そのうちに上達します。散歩

とらへやうと努めてゐる所がいゝです。

▲淺井千別君の「郊外の工場」は骨折つた畫です。唯も少し物を陰日なで見てゆくといゝです。つまりすべてに「面」の觀察が必要で、それが欠けてゐるから、この畫は説明があつて感じがないのです。

幼年詩選後

若山 牧水

土地々々の言葉で歌つたものに甚だ佳いのがあつた。開口さんの「やなぎ」秋葉君の「百舌鳥」などがそれだが、まだ發表しきれないのにも惜しいのが澤山あつた。例へば、矢張り千葉縣東金小學校の木村彰一君の

唯夫々々、来てみるや、桶屋山田んとこん、やん目つぼ／＼と、書いてあるよ、面白れぬ、だつたらか。

や、茨城縣大賣小學校横瀬きんさんの、おらじの前のいなりさま、毎朝こぼんをあげられて、うまいうまいとだべんだんべ。

うまい／＼とたべるだらうと謂ふだ、べんだん、べんなどの言葉をそのまゝの發音で歌つて聞かせられたらなほ面白からうと思はれた。然し念のために云つておく、これらは偶然に土

でもしたら、どんな小さいことでも見過しはしないぞといつた風にやつてごらん下さい。

ちやうどこの選をやつてゐる日の新聞に、佐藤草といふ飛行家が墜落慘死したことが出てゐます。鈴木さんの「ひかきうさ」はまだ佐藤さんか故郷秋田の空を飛んでゐられた時のこととです。今ではいたましい記念の文章となりました。

こんどの中にはするぶん長いのがあつて、そんなのは雑誌に出すためにだいぶん省略いたしました。太田さんの「車を引く馬の話」などもそれです。太田さんのはいゝものでした。かういふ風な書き方はこれまでしばしば見しました。私はホストですとか、私はホールですとかいふのです。でもこれもいややみがあつていけませんでしたが、太田さんのは子供らしい感じがよく出てゐました。

子供らしい感じのすばらしく生々したものが見たいものです。

子供のをどり上つたやうな生活の描寫を讀者はどんなにほしがつてゐますが、これをもつて新年の辭といはします。(ナマメト)

童話選評

齋藤 佐次郎

新らしく出た本

九六

◆不思議な窓 (西條八十先生著) 西條先生の童話は兒童に豊かな想像を興へて、彼らの生活に美しい感情を芽生えさせるために書かれたものであります。不思議な窓、六さんと九官鳥、人魚ものがたり、その他、お月さんに評判になつたものですが、その他、お月さんに評判にかけた話「アサミイとお月様」などいのが澤山あります。裝幀と挿繪は岡本先生の筆になつたものでありますからいふまでもなく立派です。(四六判二五六頁、定價一圓八十錢、東京市神田區南神保町尙文堂發行)

◆水の赤ん坊 (横山有策、胡桃正樹共譯) 原作者は英國の文豪チャールズ・キンケルスレイであります。これは近頃にない立派な童話集として皆様におすゝめすることができまことであつて行く美しい物語です。單に面白く美しいばかりでなく、少年少女にとつて實に益々智慧の泉となります。近頃どん／＼出る俗な陰氣な童話にくらべて、これほど何といふすばらしく愉快な明るいものでせう。(四六判一九二頁、定價一圓八十錢、東京市神田區西紅梅町十二同人社發行)

◆ハツクルベリ物語 (佐々木邦氏譯) 世界少年文學名作集の第十九巻として出たので、作者は同じ童話の第一巻として出たトム・ソウチャー物語の著者マーグ・トゥエンであります。トムの友人であるハツクルベリはトムにも負けず、物語で勇戦をこな

か賢くつて至るところで大膽な冒險的なことをみかやつて行くたよにも愉快な物語です。米國の子供も日本の子供もよくべり同じこととです。悪戯さかりの少年にとつてこれ位面白くもありません。(四六判四三二頁、定價二圓五十錢、東京市牛込區津久土町精華書院發行)

◆熊狩の旅 (徳川義親侯著) 熊狩り有名な侯爵が北海道から千島まで熊をたづねて行かれた時の紀行文です。柔かに面白く筆で書いてありますから、肩もこらずにすべ／＼といつづの間にか全篇を讀みとほせるもので熊の話やアイヌの話はいふまでもなく皆深い北海道の風物がパノラマを見るやうに濃く入である眼の前に展開されます。その間に微笑みたいやうなお話それからそれへと出てきます。(四六判二五八頁、定價一圓五十錢、東京市牛込區津久土町精華書院發行)

◆新民謡 (本居長世先生作) 民謡作の大家本居先生の作曲集です。第一編「ますらひの風の歌」(三木路風氏歌、岡澤葉畫伯表紙畫) 第二編「夕潮」(伊藤小四郎氏歌、岡本路一畫伯表紙畫) 第三編「別後」(野口雨情氏歌、老海友太郎畫伯表紙畫) 第四編「豊作唄」(野口雨情氏歌、小川治平畫伯表紙畫) 第五編「關の夕ざれ」(古藤、加藤まさを畫伯表紙畫) の五篇が新刊されました。新しい民謡の唄ひ方はこの叢書を見れば曲書の讀める人ならどなたにもよく解る美しい本です。(各編定價三十錢宛送料四錢、東京芝區田町一ノ二岸本書店發行)

▽今月は割合佳作の少い月でした。それでも細かにしらべて行くと、捨て難い作がなかなかありました。笹原とり子さんの「葬路の春」などは特に目立って特長のある作ではないが童話として大變に面白い傳説でした。

▽谷口佐和さんの「不死の蠶水」は童話が童話の型を破って愉快でした。作の暗示が實にいいものです。作意に面白い批評がありました。しかし、情しい事にはその暗示は大人向きなのが残念です。少年少女達には作の表だけを見て行つて、裏を見る事が出来ないでせう。しかし、優れた作でした。

▽千葉新一郎さんの「家鴨の川端會話」はいつもながら達者です。達者過ぎる位です。今度の作など特にさう感じました。
▽樂附康明さんの「古寺のお化の話」はのびのびして面白く讀まれました。お化けの正體を調べたら古ツツラの中の一枚の錦畫だったといふ結末は實に面白いと思ひました。書方が少し講談調になつてゐて、無駄の多いのがキズです。

▽荳生政子さんの「若子さんとメス」は女らしい見方があつて、柔らかな本當に味のものです。深柄惇さんの「佛像を射た男」と作開藤さんの「こはい話」共にいい作でした。

水府樓、人見東明、三木露風、小川未明氏位のものでした。ある一派の詩人達は童話を云云するは文化文藝の邊縁だなどと酷評をした位です。その後十幾年間、何人も童話を口にする人はなかつたのですが、遂ひ二三年前になつて、初めて、童話は子供だまではない純真な藝術的素質をもつた詩話であると云ふことが認められたのでした。

そこで「金の船」は創刊來、數頁をつひやして、童話正風の新運動を起したものでした。西條八十、三木露風、藤森秀夫、西川鶴氏も自信ある童話を寄せてくれたし、又、一方では童話と音楽の一致運動のために、本居長世、中山晋平氏始め山田耕作、北村季晴氏も作例を寄せてくれたし、特に本居氏は童話音楽を一般的に普及して、特に本居氏は童話音楽を、都築、加田、大沼、竹内、吉本、山田の諸君が「金の船童話會」を起し、それが日本

童話の選後に

野口雨情

探越白春さん。奈加島佳代子さん外二三の讀者のかたから「わたし共の知人中には、童話に子供だましとしか考へてゐない人が多いので、童話に對して本當の意義のある所を開かせて下さい」と云ふ意味のおたづねがありました。皆さんが考へ違ひのないやうに一言お答へいたして置きます。

あなたがたのお友達ばかりでなく、十人のうち八九人までは、童話は子供だましの唄だとして思つてゐないでせう。それは決して無理のないことです。童話は全く子供だましの唄だとして思はれてゐなかつたのです。明治四十二年(今から十四年前)に、童話に、決して子供だましの唄ではない。童話の中にはほんたうの日本の詩話としての素質が含まれてゐると云ふことに気がつきました。そこで私は「朝花夜花」と云ふ童話と民謡のパンフレットを發行して詩壇の反省を求めましたが、その頃は翻譯文藝の混沌時代で誰一人耳を傾けてくれてありませんでした。しかし私のこの企てを喜んでくれたのは、坪内逍遙博士と島村抱月氏でした。又友人のかたでは久本

して、童話正風の新運動を起したものでした。西條八十、三木露風、藤森秀夫、西川鶴氏も自信ある童話を寄せてくれたし、又、一方では童話と音楽の一致運動のために、本居長世、中山晋平氏始め山田耕作、北村季晴氏も作例を寄せてくれたし、特に本居氏は童話音楽を一般的に普及して、特に本居氏は童話音楽を、都築、加田、大沼、竹内、吉本、山田の諸君が「金の船童話會」を起し、それが日本

金の船

誌友募集

「金の船」の誌友には、いろいろの特典がありますので、月々非常な勢で増加して参りました。誌友規程書は編輯所宛にお申込み下さい。すればお送りいたします。舊つて御入會下さい。

童話會となつて童話雑誌「とんぼ」を發刊したり、又、仙臺の天江登美草、鍋本碧雨君が雑誌「おてんとさん」を起して金の船童話の色彩を宣傳してくれた。茨城の藤田、枝川神田、羽田、高橋の諸君が茨城童話會をつくつて雑誌「つばめ」を出したり、常陸若柳校からは栗野柳太郎君によつて最も優れた郷土童話の作品が生れて来たり、千葉の橋本靜雨、細井貞三郎君の熱心によつて金の船の童話が

同縣下に宣傳されたり数へくれば數限りないほど全國に亘つて金の船の童話が唄はれるやうになつたのです。隨分永い間閉却されてきた子供の情操を養ふよから云つても童話に最も意義のあることでもある。純真な一藝術の新発見であるとも云ひます。どつちにしても子供だましの唄だと思ふやうな人には、ほんたうの童話の意義はいくら呑み込むやうに話したつて恐らくは無駄だらうと思はれます。

◆本誌早わかり(白眉出版部編)本誌の解らない人でも讀めばよい。二時間ともかゝらないうちに直ぐ解るやうになります。簡単に、親切に、手をとつて教へるやうにほんたうにわかりよく出来てをります。(定價一冊五十錢送料二錢、東京芝區田町一ノ十二岸本書店發行)

▼童話掲載外佳作 △不死の蠶水(谷口佐和) △古寺のお化の話(樂附康明) △家鴨の川端會話(千葉新一郎) △五錢白銅の旅(寺島西男) △こはい話(作開 抱月) △若子さんとメス(荳生政子) △佛像を射た男(深柄惇) △赤い心(全見房雄) △栗拾ひ(米田延次郎) △櫻の國(細野さん) △ペンヤンにつられて(長谷川薫) △青年と散髪師(都外川美紀) △お山のをちさん(山口軍三郎) △楽しい日(土橋力) △日曜日の午後(佐々木高明) △驚の羽(椎名恭一) △無花果(井上幸子) △二人のお爺さん(宇留間哲) △響のお國(顯考興) △雨降る日(森紅玉) △鐘檢時司(△成る日) 門倉重雄) △太郎と馬場澤喜(八郎) △旦那と馬子(新井國雄) △狸の演説(村山志月) △海中の勇士(丸岡精一)

▼童話掲載外佳作 △雁(東京 須賀武雄) △日本晴(長野 花岡俊男) △己のお家(東京 西川博一) △鍛冶屋(神戸 西田信一) △樞の木(東京 中島實) △秋の夜(山梨 土橋力) △とんぼと(東京 森本義一) △明日は雨(京都 人見政子) △いね(京都 玉井榮水) △お猿(大阪 佐伯健一) △川は川(神戸 小山勇) △成る下(三原 谷口暹) △村の夜(東京 安藤勝彦) △壁のおしやれ(滋賀 山田金三) △秋(新潟 松尾貞一郎) △柿(神奈川 小澤登子) △お香戸の家(東京 島田信市) △おだん(東京 及川一郎) △童話(埼玉 門倉重雄) △雨の夜(宮城 本村幹夫) △お月様(千葉 主井喜子) △京島(東京 和田光子) △雪だるま(東京 堀内靖夫) △なみだ(東京 竹内とかづ) △とんぼ(東京 秋山冷子) △よつばら(東京 鈴木一誠) △ねんねの窓(東京 山田白羊) △狐の尻尾(東京 江口紅詩郎) △西風の烟(東京 吉田六郎) △お星様(東京 島田秋翠) △夕燒(東京 岩崎數樹) △流れ星(東京 鈴木榮) △夕立(愛媛 黒田正忠) △すずめ(大阪 瀨川水燕) △大掃除(京都 深柄惇) △千鳥(福岡 山口白秋) △蟹のかくれんぼ(静岡 深美波瑠郎) △みの蟲(愛知 村瀬米一) △水ぐるま(山形 櫻井行哉) △ひよこ(東京 新野新七郎) △運動會(東京 米田延次郎) △おぼたけ(東京 加東謙雄) △鎌切蟲(東京 青山しげる) △はみがき(東京 古川芳隆)

▼幼年詩掲載外佳作 △やなぎ山梨宮澤とし子) △野路(茨城 平間芳夫) △大きい月(福井 澤田貞三) △風(福井 松山カノ) △たいたいさん(兵庫 佐野康紀) △雲(大阪 天野義二) △いね(茨城 横瀬秋男) △すかし(福井 川崎喜一) △いね(茨城 佐口政信) △風と時計塔(椎名恭三) △スミ(調橋 中野樹子) △風車(北海道 山田實) △いつも通る先生(千葉 中島たけ) △舟(不明 大塚篤雄) △雀(臺灣 林祥彬) △妙高山(新潟



りよだ名讀

▽これから私も、一生懸命になつて投書させていただきます。金の船の皆さんどうぞよろしく。(東京 和田光子)

▽本日金の船を手にする事が出来ました。いつに變らず立派なものに、笑ま事にあられません。當地の熊内教育で、日曜学校の生徒の讀物について調べましたところ「金の船」を要請する者が非常に多かつたといふことが、大阪朝日新聞の神戸附録にのつてをりました。私は自分のことのやうに嬉しくて、思はず胸がなりました。(神戸 けい子)

▽冬が来ました。雪風が吹いて来ました。僕は雪の子です。風の子です。僕は、春も夏も秋もすきですが、冬もすきです。冬は雪が降つて、水がはつて、僕は真に勇敢に冬をくらすと思つてなりました。北國 野田晴夫

▽茨城縣若柳小学校児童の童話、栗野柳太郎先生が奨励したけあつて、地方色の濃い純日本童話として全国のどの學校にも冠絶してゐる。(茨城 下宿生)

▽讀者諸君、そろそろ寒くなつて来たぞ、ほろすけは、一集を作らう(山梨 川川伸一)

▽記者先生、このたびは富選賞をお送り下さつてありがとうございました。長野末末)

▽「金の船」を見ては、こころおこします。私は毎日「金の船」を手にして、こころおこします。院長の入選書にまで金の船が描かれる。私は愉快でたまりません。(名古屋 川地榮一)

▽「金の船」の愛讀者になりました。大へん面白いので皆で見えます。(新潟 岸野たま)

▽ちらちら。木の葉が毎日散つてゐます。林の中は明るくなつてしまひました。遠くの山もだん／＼はつきりして来ました。あゝ私は淋しいのです。草深い田舎で暮してゐる私は秋が暮れて行くのをどんなに淋しく思ふぞう。あゝ、でも、私は一つ楽しみを持つてゐます。それは東京の姉さんから毎月送つてくれる「金の船」があります。(茨城 露子)

▽皆様私は今度「早苗」と云ふ小雑誌をつくり入会なさつて下さいませ。會員は一月送料共で十銭です。くはしくは切手二銭封入して居ります。(横濱 藤本紫陽)

▽野口先生の「十五夜お月さん」が長くも宮様に讀まれましたといふことをけふお母さんから承りました。まあ、ほんたうになんといふ名譽なことでございます。讀者の皆様野口先生にお喜びを申し上げやうではございせんか。(東京 谷田部富子)

▽私は七月號からの愛讀者です。當分病氣の爲に投書を休んでをりましたが此の度再び投書する事にします。幼年詩藝方は行數が定まつてゐないので、私はいくら長くても短かくてもよろしいのですか。私は一層投書に盡力します。では「金の船」の發展を祈ります。(姫路市東魚野 大貫一夫)

▽幼年詩や綴りに行數の制限はありませんが、たいてい毎月出てる位の程度です。(記者)

▽普藤佐次郎先生の「狐のお化け」はほんたうに面白うございました。こればほんたうのふ作のをせてくれて有難い東京 山野希実)

▽「金の船」もう此名前からして人をチャラくする様な方があると思ひます。實際御本は見るからに感じのよい、どの本よりも勝れてゐると思ひます。野口先生の童話、本居先生の曲書、岡本先生の挿畫がますます好きです。「金の船」の生命だと思ひます。家の人は勿論どのお友達に見せてもこれは素敵だ

謹賀新年

金の船編輯部

- 一月元旦
- 岡本 歸一
- 横山 壽篤
- 田中 實
- 野口 英吉
- 山脇 代吾
- 船橋 重一
- 齋藤 佐次郎
- 三宅 房子

(いろは順)

日本の童話でございませう。私共の家庭では西洋臭いお話で少しも子供が喜ばせてもございませう。この點から申しますと「金の船」は最も意義のある良雑誌だと申されませう。(仙臺 とし子の母より)

▽僕は「金の船」の合本をクリスマスの贈物として北海道に居られる舊友木村一花君に呈しました。(東京 福田誠)

▽十二月號の口繪の「夕陽」は何んていゝ畫でせう。私はすぐと額に入れて私のお書齋の壁にかけました。毎日眺めてゐます。(群馬 下宿生)

▽記者様、きれいで便利な賞品をいたゞいて有難う御座いました。澤山あるので、一年分位使へます。本當にありがたうございます。(熊本 田澤生)

▽三宅房子様、妾は「林へ子を捨て」の貴女のお話を讀んで熱い涙に暮れました。妾は幼少の折両親に死に別れて二十幾年間を暗い境の中をさして来ましたが、今は小學校に奉職して居りますが、親子の情といふやうなお話を讀むたび胸が一杯に迫つて来りませう。(群馬 いばな草)

▽賞誌十二月號童話欄の網野まんまる君の雁の歌には實際感激した。同君の健康を祈ります。(府中 田澤生)

▽今か／＼と待つて、今日も風呂から歸つて来て机の上を見つて、今日も風呂から歸つて来た船が来て居る。表紙や口繪のまんまといゝとびつくりしました。(神戸 高橋久蔵)

▽「金の船」には野球小説や冒険小説がないから僕はすかねて友だちがいふから、僕はそんなやうなものがいいからいいのだといつてやりました。さうでせう。(大阪 得二郎)

懸賞創作募集

◆ 少年少女の創作 ◆
 自由畫……………山本 鼎先生選
 幼年詩……………若山 牧水先生選
 綴方……………編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなふうになし、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないようにしてください。用紙は自由畫はなるだけ費用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差し上げます。次號締切は十二月廿五日(その以後は次號へ廻る)發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

◆ 一般讀者の創作 ◆
 話……………齋藤 佐次郎 先生選
 童話……………野口 雨情 先生選

〔意注〕 童話は二十字語二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五回、童謡には二回づつ、特選の場合は童話には一回、童謡には五回づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の船」賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を附して下さい。

新春絶好の贈物

「美しき金の船」の合本

「金の船」は創刊號以來毎號、諸大家の書かれた面白い童話と、ほんたうに親みの深い童謡と曲譜とが載つてをります。又、どの頁を開いて見ても、岡本歸一畫伯の描れた「金の船」獨特の繪がはいつてをります。丁度「金の船」の合本は、童話、童謡、曲譜、挿畫を一緒にした、美しい繪巻物を見るやうな感じがいたします。お子様方のあるなしかへはらず、どちらの御家庭でも、この美しい「金の船」の合本だけはお備へに必要があります。

第一輯

第一巻初號より第二巻五號まで七册合本 定價一圓八十五錢

第二輯

第二巻六號より第三巻十二號まで七册合本 定價二圓十五錢

第三輯

第三巻一號より第三巻六號まで六册合本 定價一圓九十錢

第四輯

第三巻七號より第三巻十二號まで六册合本 定價一圓九十錢

(第一輯より第三輯まで、又は第一輯より第四輯まで一時に御注文の方へ對しては割引を致します)

アンデルセン船 世界名作童話集

全一冊 定價三十五錢

▼ 此際御入用のお方は便宜上、東京市外田端三五一番地「金の船」編輯所へ御申込み下さい ▲

(本號に限り金四拾錢)

定價 壹冊 參拾錢 送料 壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
 壹ケ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
 但し新年號四月號九月號は特別で廿五錢です。御注文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお申込み下さい。
 振替口座東京〇五七五番

〔送〕 御注文は必ず前金で御申込み下さい
 金 送金は振替が一番便利で御座います
 の 切手代用は(壹錢切手)一割増しです
 (意注) 〇 何冊何號よりと書いてください
 〇 住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お返し致します

大正十一年一月一日發行(行) 行(日發行)

編輯人 齋藤 佐次郎
 發行所 東京市麹町區飯田町六丁目廿五番地
 電話九段二七五二番
 東京市外田端三百五十一番地
 電話小石川五三七八

將にシズン來る

諸君の爲代理部の開設

値段其他の御希望を明細記入の上、御注文になれば責任を以て必ず諸君の満足の出来る品を撰擇します

□好評噴々たる

ソリドンマ



定價表
CBA
その他五十二圓五十八圓三十圓

□賞讚の的となれる

ソリオキアヴ



定價表
その他二十九圓五十二圓五十八圓三十圓

□素人向きのカメラ



定價表
十二圓 十八圓 廿二圓 廿六圓 三十二圓 三十三圓 七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事、御注文は住所を分りよくわしく書く事、代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

キンノツノ社代理部

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

型録入用の方は貳錢切手二枚要す

◀よ乞を添書御旨し見てに[船の金]す必は方の込申御てに告廣此▶

米國神學博士エム・シー・ハリス監督序、米國文學博士片山澄序、アメリカン英語學會編
簡易英語獨習自在 定價參圓の處三千名限(他の英語講義錄全部と) 特價送料共貳圓五拾錢(同じ紙數・價は其半價)
日本のカナが讀める人にはだれにでもわけなくスラスラと覺えられる無二の自宅獨習書

- 柳田先生著 穂ヶ羅斯順上製箱入
『和』『讀書界』無代進呈 (ハガキで申込は何人にも無代にて進呈します) 東京市神田區 朝奉迎記念館 小川町四一 忠文堂雜誌部
- 要讀算術自習大成 定價八圓 送料八錢
 - 大志偉人修養之徑路 定價八圓 送料八錢
 - 帝國相撲協會編著 大村清友先生編著 四十八相撲必勝法全書 定價六圓 送料六錢
 - 大村清友先生編著 演說雄辯是さいあれば 定價五圓 送料四錢
 - 心理研究學會編著 必携記憶術實習全書 定價五圓 送料四錢
 - 大日本教育會編著 小學校立志之顧問 定價四圓 送料四錢
 - 東京學生俱樂部編著 立身之現今無學資成功法 定價八圓 送料六錢
 - 大隈侯爵序文新戶郡博士序 成功青年立志寶鑑 定價壹圓 送料六錢
 - 商務振興會編 是非心得商人成功之路 定價七圓 送料六錢

- 廣谷廣村先生編著 俳句・小品文の作り方及範例 定價六圓 送料六錢
- 牧野法學博士序中平法學士編著 裁判書通受・驗要義 定價三圓 送料三錢
- 大日本武進獎勵會編著 活殺柔道劍道早學び 定價五圓 送料四錢
- 神祕術研究學會著 自在催眠術實習全書 定價五圓 送料四錢
- 加茂先生編著 中學師範及高女・受驗實力養成全書 定價七圓 送料六錢
- 實業・陸軍幼年 大村清友先生編著 讀書熟語解釋 定價七圓 送料六錢
- 聖山大學長櫻田大徳正題 効驗秘法、呪ひ一箇題附 定價二圓 送料八錢
- 水野前内相序海外植民學會編 離飛海外渡航準備全書 定價九圓 送料六錢
- 川口義久博士序大村清友先生序 必携國民禮式須知 定價九圓 送料六錢
- 大日本文學會編著 總ヶ羅斯上製箱入 儀禮式文作法及作例大集 定價十二圓 送料十二錢

東京市神田區 小川町四一 忠文堂雜誌部 發行所
東京市神田區 小川町四一 忠文堂 發行所

野口雨情
先生新著
中山晋平先生
作曲挿入

愛の歌

四六版美装箱入二百三十頁・定價壹圓五拾錢 送料金八錢

クリスマス
りよ
新年へ

少年少女、殊に女學生間に「愛の歌」は非常な評判です。「全卷悉く詩なり涙なり」といふ評は到るところに聞くことが出来ます。又「美しき國へ」は聖キリストスロオ物語を中心に「尊き笛」小鳥の花「天の使ひ」の三篇を納めたる蘆谷先生の傑作、切に愛讀をお待ちします。

蘆谷蘆村先生著

美しき國へ

四六版美装箱入
二百三十有餘頁
定價壹圓五拾錢
送料壹冊金八錢

東京 振替 行發社文創 川石小京東
番二八五 〇九町崎戸

◆現代童話の粹を集め精を凝せる一卷◆

現代童話選集

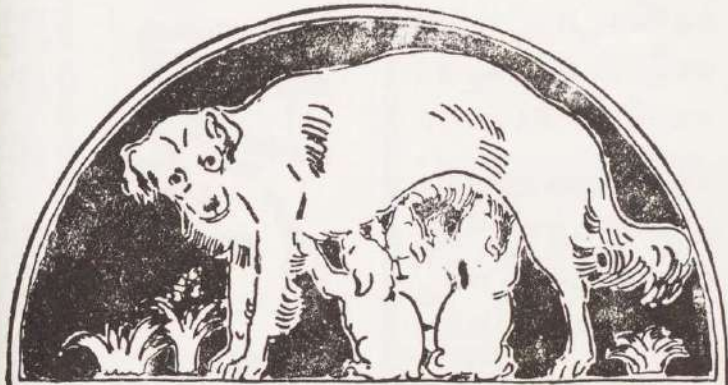
秋庭雨彦 芥川龍之介 宇野浩二 江口千代 江川未代 小川池 菊米正 久保萬太 小島政 佐藤春二 白鳥省吾

豊島與志雄 中村星湖 野口雨生 野上彌生 濱田廣生 廣津和郎 福田正夫 福士幸次 山田宗次 吉田康二 井上文郎

現文壇に於いて童話に筆を執る小説家、詩人二十五大家の作、收むる所二十八篇、傑作中の傑作を集め、眞に藝術的童話の精髓をなす児童讀書界に一大曙光を與うるものなり。地上樂園としての童話時代に住む美しき反映、又懐しき搖籃の追慕として、この集は人生に與へられたる永遠の光である。愛しく又美しき時代のわか記録を、惜しみなき愛を與ふるわが子に唯一の友として、この書は如何なる家庭にも何人にも必須なものである。

◆入箱金天頁百四判大六四◆
◆本美葉數畫挿繪口刷色五◆
— 幀裝氏雄武井武 —
錢八稅 圓二金價定

東京 市外 高田 町 一 堂 步 一
電話 番 七 二 四 四 四 番 話 電
番 一 五 一 九 五 京 東 替 振
番 七 二 四 四 四 番 話 電



大正八年十月十六日
大正十年十二月六日
大正十一年一月一日
大正十一年一月一日

東京 キンノツノ社 發行

新年お目出度う
御座います……

昨年中は非常なお最良を蒙りまして、誠に難有く厚く御禮を申し上げます、どうぞ本年も相變らず、お引立遊ばさる様偏に御座ひ申上げます



三越呉服店

◆◆ 町河駿京東 ◆◆

定休日 ◆一月一日

◆十日 ◆廿五日 ◆

(本號に限り四拾陸)